
スクランブルワールド 2

人鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクランブルワールド2

【Nコード】

N4571N

【作者名】

人鳥

【あらすじ】

吸血鬼・竜・魔法使い。肉塊生物や、仙人やカマイタチや。人の意識に深く根付いた存在が顕現する世界。

一介の高校生であったはずの平野拓は、吸血鬼、リーゼ・ブリュスタンとの出会いにより、そちら側とのかかわりが深くなる。

虚構と関わる生活の中で、彼は何を見るか。

キャラクター紹介と用語説明（新出用語のみ、随時更新）（前書き）

新キャラの名前も最初から載っています。「ネタバレ嫌ー！」って人にはあまりお勧めしません。製本された小説、と思っでご容赦ください。

未登場新キャラはキャラ紹介の最下部。登場後、移動する可能性があります。

用語説明はキャラ紹介の下です。これに関しては、登場後随時更新します。

キャラクター紹介と用語説明（新出用語のみ、随時更新）

キャラクター紹介

平野 拓（16）

・本作の主人公

リーゼ・ブリュスタン（1908）人間的には…何歳だろう？

・吸血鬼

細江 八重（16）

・クラスメイト

足立 夏樹（16）

・クラスメイト

灰谷 琴音（乙女の秘密）

・ドラゴン

佐倉 陽平（15）

・中学生

黒木 芽衣子（32）

・饒舌なお姉さん

千堂 天（21）

・不思議な大学生

人影 宗次（16）

・フリーター

人影 京香 (15)

・中学生

吉岡 沙紀 (19)

・ほのぼの大学生

山岸 (32)

・クラスの担任。

石動 彰彦 (16)

・反世界学のクラスメイト

リンクス (14：外見年齢)

・旋風に生きる者

ドギイ (2052)

・ヤタガラス

アグウ (1254)

・ガーゴイル

用語説明

・旋風に生きる者

旅人。異世界にだって旅に出ることができるように見受けられる

が、実際のところ不明。自分が一生を過ごす場所を求める。

・アカガミさま

京香が通う中学で流行している呪い遊び。さまざまな条件下でのみ効果を発揮。

通常なら成功するはずもないのだが……。

・コツクリさん

言わずと知れた遊び。派生としてエンジェルさんなるものも存在するが、結局は同じものである。

占いであるが、交霊術ともいわれる。狐、狗、狸の文字が使われており、それらの動物霊を呼び寄せるとか。知名度が高いので、かなりメジャーではあるのだが、やはり手は出さないのが賢明だろう。

・反転世界
リバーサルワールド

並行世界とは似て非なるもの。

・鏡面世界
きょうめんせかい

反転世界の別称。

人影京香が具現化した仮想世界。

・ヤタガラス

漢字では『八咫鳥』と書く。日本神話において、神武天皇に遣わされた神の使い。

本作でも三本足で記載され、三本足のイメージは強いが、そのよ
うな史料はない。

・ガーゴイル

化け物を模した石の彫刻で、排水口として使用される。

ファンタジー小説などにおいては『石』に着目した設定がなされ

ることが多いが、本作はそこをほとんど考慮していない。
当然、プチガーゴイルなどというものは存在しない。

・ 魔導書^{まどうしょ}

特別な力を秘めた本。

各魔導書が持つ能力は、それに書かれた内容に即する。

・ 『トリガーエンド
幸福論』

終わりこそが幸福への道である、という内容が記された魔導書。

プロローグ（前書き）

『スクランブルワールド』の続編であり、そちらを既読であることとを前提として書かれています。

<http://ncode.syosetu.com/n920>

6k / 前作

お久しぶりです、人鳥です。お待たせしました、『スクランブルワールド2』を開始します。

ジャンルが学園なのは、前作がそうなっているからです。

この作品、ジャンルはどれにしたらいいのでしょうか……？

プロローグ

この世界が仮にAとしよう。Bの世界にはもう一人の『ぼく』のような存在がいる。エレーナ・リューゼンディッツヒの事件が終結し、吸血鬼を傷つけたぼくに黒木さんが話してくれたことだ。

本当はもう少し詳しく教えてくれたのだけだ。
存在が顕現する仕組みについて。

それは人影兄妹のような、鏡の向こう側の世界のようなもの。

同一ではないけれど、限りなく同じなもの。

誰だって そう、誰だって鏡を初めて見た時、その鏡に映るもう一つの世界を夢見たはずだ。

パラレルワールド
並行世界。

世界は広く、大きく、多い。それを理解するのは、リーゼ・ブリュスタンと出会い、エレーナ・リューゼンディッツヒと対峙する、その期間で十分だった。世界学という欠陥と矛盾の学問よりも、黒木さんの説明のほうが納得がいく。

そうじゃないやつもいるけどな、と黒木さんはつぶやく。

リーゼも言っていた。

『気づくのが稀』なのだ。

それはつまりそういうことで。

ぼくたちが気づいてないだけで、もしかしたら目の前で異常が起きているのかもしれない。

気づかないだけで

巻き込まれているかもしれない。

橋に建てられた街灯の上に、どうやって登ったのか中学生くらい
の少女が立っている。

風が吹いた。

肩まで伸びた髪が、風に吹かれて顔にかかる。風に吹かれた少女
は、不愉快そうに髪を押さえ、風の声を聞く。

しばらくじつと耳を傾け、静かに口を開いた。

「嫌なおいだ」

顔をしかめ、においの先を見据える。

「死にゆくにおいだ」

川をまたぐ橋の上。

吹き抜ける風が強くなる。

「虚構が死にゆくにおいだ。ぼくは 旋風に生きる者。死にゆく
虚構を見定めよう」

1 (前書き)

本編の一発目です。
長めです。(当社比)

あれだけの戦闘があったというのに、校舎は奇跡的に無事だった。ただし、校庭は大きなクレーターのようなものができていたり、土が盛られて山みたいになっていたり、変わり果てた姿になっているが。それにしても、昨日の今日で授業再開する学校側は、なかなか肝の据わった組織だ。

公立学校だろ？ 一応。もうちょっと慎重になってもいいんじゃないのか？

教室に入るなり、リゼのファンらしきクラスメイトたちが、ぼくに声をかけてくる。正確にはリゼにのんだけど、今日に限っては間違いなく、ぼくに声をかけてきたのだった。

いつもよりもかなり早く来たので、教室には誰もいないと思っていたのだけど、それは甘い考えのようだった。

「リゼちゃんは？」

「体調不良で寝てる」

まさか本当のことなんて、話せるはずがない。話しても理解できないだろう。

「そっか。大丈夫なの？」

心配そうにたずねてくる。

「うーん、明日や明後日ってわけにはいかないかも」

「え？ 酷いの？」

「風邪だと思っけど」

「そっか。お大事にっ」

「おう」

そいつとは別れて教室に入る。机に鞆をかけると、細江さんがやってきた。

「おはよ」

「ああ、おはよう」

「昨日、何が起きたの？」

「ああ……」

細江さんには、隠さずに話すことにした。

リゼのこと。

吸血鬼を殺す機関のこと。

魔銃のこと。

アイーナのこと。

暴走したリゼのこと。

ぼくとリゼに関わることを全て話し、細江さんにはそれを他のクラスメイトには黙っていてもらうように頼んだ。

巻き込まないようにと思っていたのに。

こつも簡単に巻き込んでしまう。

「わかってるよ」

真剣な顔でうなずく。

「うん、まあ、お疲れ様」

「ぼくは何もしてないよ。結局傷ついただけだった」

つい口を突いて出てしまう。京香ちゃんにも何度となく違つと、

言っではいけないと、そう言われていたのに。

細江さんは何も言わずに、ただぼくを見ていた。どういつ風に接したらいいのかが、わからないといった様子だった。

「そういえばさ」

だからぼくは、話題を変えることにした。この話題にある限り、どうしても駄目な方に考えがいつてしまう。

「細江さんっていつも朝に声かけてくれるけど、女子のグループのほうはいいの？」

聞くと、細江さんは苦笑した。

「グループっていつても、そんなにべつたりしたものじゃないよ」

一瞬、細江さんの視線が動いた。視線の先を追ってみると、いつも一緒に、別行動をとっているのを見るほうが珍しいような連中がいた。

「四六時中一緒にいるものいいけど、疲れるでしょ？」

「まあ、そうかもな」

少なくとも、ぼくにはできないだろう。

「そういうことだから、心配しなくてもいいよ」

そう言って笑い、細江さんはふと、ぼくから視線を外した。

「おー、足立くんおはよー」

「おっす」

夏樹がこちらに歩いてくる。

「いやいや、昨日寝坊してたからよ、休みでよかったぜ。あれ？」

「そっいえばリゼちゃんは？」

「……昼に説明するけど、まあ体調不良と思っておいて」

さすがに時間も時間で、教室内にはクラスメイトの顔が多くあった。ここで本当のことを話せば、きっとほかにも漏れてしまうだろう。

「なんだ。吸血鬼も体調崩すんだな」

ここからは少しはなれたところから、そんな声があった。誰の声かなんて、考えなくても分かる。

「石動」

リゼが転校してきたあの日以来、石動はクラスから浮いていた。世界学を信じない人は大勢いて、それはそれで世間的に認知されている。けれど、クラスメイトに対してあんなことを言ってしまうえば、それは浮いてしまっても仕方ないことだろう。

世界学を信じていないにも関わらず、それが事実であるようなことを突きつけられてしまっている。自分に対する苛立ちもあるだろう。最近の石動は、とにかく不機嫌だ。

「お前な、世界学を信じるとか、リゼちゃんが吸血鬼だってことを信じるとか言わないけど、そういう口の聞き方はどうかと思うぜ？」

夏樹が不機嫌そうに言う。クラスメイトたちの視線が、自然と集まってしまふ。ぼくはとっさに視線をめぐらせたけれど、灰谷はまだ教室には来ていないようだった。

「は。言いたくもなる」

「どういうことだよ？」

何か言いたくなるようなことでもしただろうか。ぼくたちは今まで、ふつうに生活をしてきたように思うのだけれど。

「昨日の事件、お前らが関わってたんだろ？ 正確には、平野と吸血鬼とドラゴンだ」

石動はリゼと灰谷を名前では呼ばない。人間ではないから、だそ
うだ。

クラスメイトたちがざわめき始める。「どういうことだ？」「本
当なのか？」などと、疑問の声が上がっている。

「なんだ、誰も見てないのかよ。昨日化け物が町にいたとき、平野
たちは外にいたんだぜ？ どうしてわざわざ外に出るんだよ。なあ
？」

馬鹿にしたような口調。けれど、ぼくはそれを真実で、言い訳す
る事無く一蹴することができる。信じるかどうかはわからないけれ
ど。

「ぼくたちは、あの化け物たちの親玉を追い払いに行ってた。それ
だけだ」

それはクラスメイトたちを驚愕させるには十分だったが、石動は
あまり驚きはしなかった。

「ああ。知ってるぜ」

その言葉に、ぼくのほうが驚愕した。

「学校でドンパチやったんだよな。なんかよく見えなかったけどよ。
けど、その親玉にだって、目的はあったんだろ？ この町を襲うよ
うな目的があったんだろうがよ」

見えなかったのは、きつと結界のせいだ。それに関しては、助か
ったとしか言い様がない。石動の家がどこかは知らないが、この学
校の付近なのだろう。さすがに外に出てまで、ぼくたちの後をつい
てきたとは思えない。それについてきたとしたら、ぼく以外の誰か
が気づいたはずだ。にいたっては戦闘のプロなのだから。

「……」

「親玉の目的、聞いたぜ？ 協会とかいう怪しげな人たちに」

話してくれたのは正直驚いたけどな、と石動は笑う。ぼくだってびっくりだ。そういうのは、一般人に伏せておくのが、セオリーじゃないのか。

「この町そのものだったんだってな？ 吸血鬼とドラゴンが現われて、この土地がいい具合にイカレたってことだろ？」

さすがにそんな言い方はしなかったのだろうけれど、おおむね正解だった。

「つまりだ、そいつらが来なかったら、昨日みたいなことは起きなかった」

「石動、お前……」

その先を言うことは。

それだけは許せない。

「はあ？ お前らがこういう事態を招いたんだろが！ そもそも平野！ お前がヴァンパイアハンターを倒さなけりゃ、吸血鬼を助けなかつたら、こんなことにはならなかつたんだ！」

「てめえ！」

それは。その言い方は、あの時リゼを殺しておけばよかったと、そう言っているのと同じだ。

先月、同じようなことを言われたのを思い出す。

走り出そうとしたぼくを、細江さんと夏樹が抑えた。ふたりに拘束され、さすがに動きが取れない。というよりも、下手に動いて、ふたりに何かあつたら元も子もない。

「離してくれ」

「ごめん。無理だよ」

細江さんが怒りに満ちた声で、ささやいた。細江さんの、こんな声を聞いたのは初めてだった。

「石動い！」

「なんだ？ 平野。痛いところでも突かれたか？」

心底馬鹿にしたように笑う。

「石動、お前言いすぎだろ。さっきの話じゃ、親玉とつちめたのも平野たちだろ？ いわば町を救ってるんじゃないか」

クラスの男子が声を上げる。そうだそうだ、と他の連中も声を上げた。

「原因を作ったものこいつらだ。当然だろ」

冷徹な目。さげすんだ目をぼくに向ける。

「すまない、石動。そこをどいてくれ。通れない」
教室がしん、と静まり返る。

石動の後ろから、暢気にあくびをしながら灰谷が現われた。

「は、灰谷」

「ん？ どうして平野が、ふたりに羽交い絞めにされている？」

ようやく気づいたのか、灰谷はゆっくりと教室の状況を確認した。それからぼくたちと石動を交互に見、納得したようにうなずいた。

同時に目がすうと細くなる。

冷徹な目。

その点において灰谷は、石動を圧倒的に凌駕していた。

「さっきなにやら田口が大声で叫んでいたから、何事かと思ったらこういうことか」

冷めた目が石動を睨みつける。

「なんだ？ 俺は今回、真実だけを言ったつもりだぜ？」

「真実だと！ ふざけるな！」

石動が言っていることは、ただの言いがかりだ。大方のことが合っているのはたしかにそうだが、けれど、それはみんなが存在することすら、否定されなければならないことなのか。

「平野がそこまで怒るとはな。よほどのことを言ったらしい」

「当たり前のことを当然のように、端的に言っただけだ」

「ふうん？ 言ってみるといい。どうせ、昨日のことも関与してるんだろ？」

挑発的な目で石動を見据える。

「昨日のこと、お前とあの転校生が、この町にすることが原因なん
だろ？ そういう話だ」

灰谷は呆れたように、大きなため息をついた。まるでそんなこと
を言われるのが、心外だとういうふうに。

いつの間にか、ぼくを引き止める腕が離れていた。細江さんも夏
樹も、灰谷の登場に安心しているらしい。それか、話がややこしく
なりそうで不安なのか。

「つまり出て行け、そう言いたいのか？」

「物分りいいじゃんか。どうせ人間でもないんだからよ、学校に通
う必要なんてないだろ」

「そうか……」

灰谷がうつむく。それは、酷く悲しそうな雰囲気をもとっていた。
けれど、すぐにバツと顔を上げる。さっきまでの悲しそうな雰囲気
は、どこにもなかった。

「……なら、お前がこの教室から出て行くといい。そのほうが、ク
ラスの雰囲気も軽く明るくなる」

どこからか「そうだよな」という声が聞えた。石動の表情が引き
つり、初めてクラスメイトの顔を見た。

迷惑そうな顔。

苛立ちの顔。

ケンカを恐れる顔。

無視している者。

「なんだよ。俺が間違ってるってか？」

「間違ってるぜ？」

誰かが言う。クラスメイトたちの中から出てきたのは、田口だっ
た。

「言いたいことはわかる。でもな、人間的に間違ってるよ。単純な
ことじゃないか。俺たちさ、それはお前も、灰谷さんもりぜさんも、
みんな含めて俺たちは仲間じゃん？」

苦虫を噛み潰したような表情で石動が田口を睨む。

「良いこと聞いた。ほれ、お前ら座りな。ほらほら、HRだ」
いつの間にか、山岸が来ていた。ぼくたちを支配している、気ま
ずい雰囲気をもともせず、むしろそれを楽しんでいるかのようだ。
「どうした？ 座らないのか？ 遅刻にしちゃうぜ？ おいおい遅
刻は止めてくれよ。だったら座れ」
クラスメイトたちは、そろそろと自分の席に座っていく。ぼくた
ちも自分の席に座った。

石動だけが、その場で立ったままだった。

「どうした、石動。座っちまえよ。今ならまだ、元に戻れるぜ？」
「勝手にしろよ」

苛立ちを隠しもせずに吐き捨て、石動は、これからHRなのにも
関わらず、教室を出て行ってしまった。

「行っちまったよ。若さだねえ、どうも。まあ、いいや。ふんふん」
山岸が教室全体を見回し、欠席者の記録をしていく。書き終えた
らしく、顔を上げた山岸には、リゼは風邪だと嘘をついた。

簡単な注意事項だけを連絡し、山岸はHRを終了させた。

「ケンカするなら静かにしろよ。職員室までダダ漏れだったんだか
ら」

去り際、山岸はそれだけを、教室にいた面々に告げた。

山岸が教室から出て行った後、ぼくたちは誰からということもな
く集まった。

「聞こえてたんだな」

「まあ、そんな気もしてたけどな、ぼくは。灰谷にも聞えてただろ」

「石動くん、どこ行ったのかな？」

「知るかよ」

夏樹は本当にどうでもよさそうに即答した。名前が話題に出るだ
けでも嫌だ、といった感じだ。

「お調子者ってイメージだったんだけどな、最初は」

「ここ以外だったらそんな感じらしいよ？ 聞いた話だと」

どっちが本当の石動かなんて、ぼくは考える気にもならないけれ

ど。

「そんなことより、リゼは大丈夫なのか？」

いつもどおり、灰谷はいつの間にか、ぼくたちの輪の中に入っていた。どうも灰谷には、気配を消してしまう癖があるらしい。どこまで意識的なのかは、わからないけれど。

「詳しいことは昼休みに」

「？ ああ。確かにここじゃあ人が多いな」

「あんまりクラスの連中、巻き込みたくないし」

「わかってる」

「ねえ、学校終わったらさ、リゼさんの部屋行こうよ」

「あー、いいかもな」

「平野。大丈夫なのか？」

「あ、ああ。大丈夫だと思うけど、反応してくれるかな？」

朝飯も食べさせてくれていただろうし、昼食もそうだろうから、

少しは体力も戻るとは思うけど。それでも、あまり期待はできない。

「あん？ だからそんなに酷いのか？」

「だから昼休みにつて」

「そうだったな」

ははは、と夏樹は笑った。

どうにも、ほんと。

いい仲間ができたらしい。

放課後、リゼの部屋の前。

ぼくと灰谷はともかく、細江さんと夏樹が怖気づいていた。昼休みに詳しいことを説明すると、本当に会ってもいいものなのかどうか、どう接したらいいのかわからないといった感じで、落ち着きがなかった。

と、二階から吉岡さんが降りてきた。

「あ、たつくん。おかえり。お友達？」

「はい、リゼのお見舞いになって」

そう言うと、吉岡さんはとたんに、うれしそうな表情になった。

「そうなんだ。声かけには反応あるからさ、ちょっと適当に話してあげてよ。退屈してるよ、きつと」

回復、してるんだ。

「わかりました、そうします。吉岡さんはこれからどこへ？」

「うん？ リゼちゃんで遊ぼうと思ったんだけど、みんな来たからもう大丈夫みたいだし。帰る」

今、『リゼちゃんです』って言いましたか！

そんなぼくのツツコミに何の反応も見せず、吉岡さんはやめておけばいいのに、その場で跳躍し、二階通路の手すりに手をかけて乗り越えた。

「はああ！」

「ええええ！」

灰谷はすでに気づいていたのか、表情を変えなかったけれど、細江さんと夏樹の驚き方は凄かった。自分が見たものが信じられないのか、開いた口は塞がらず、目は大きく見開かれている。リゼの時はそんなに驚かなかつたのに。

……あんまり自分の正体を隠す気ないのかな？ リゼも結構オーブンだし。

「ひ、ひひらひひら、平野くん！ あれ、どういことなの！」

「ひ、人ってあんなに跳べるのかよ！」

ふたりがぼくの肩をつかんで、激しく揺さぶる。

「ふ、ふたりとも落ち着け……。せ、説明するから」

とりあえず揺さぶるのを止める。

ふたりの呼吸が落ち着くのを待って、それから話し始めた。

「リゼが吸血鬼なのと同じように、あの人はカマイタチなんだよ」

「あ？」

「え？」

あー、と納得したようにうなずいた。

どうしようもなく、単純なやつらだった。

というか、この程度で納得するなら、はじめから動揺しないほうがいい。

「大体、どうしてそんなに驚くんだ。オレやリゼの時は、そんなに驚かなかっただろうが」

「あ、やー、突然のことで」

「突然具合は同じくらいじゃないか？」

誰ともなくため息を突く。転入生が吸血鬼なのと、どれくらいの差があるのだろう。

それからドアに目が行き、ぼくたちがここに集まった理由を思い出す。

「ちよつと先に入って、様子見てくる」

「あ、ああ」

中に入る。リゼは部屋の端に座っていた。物音でぼくに気づいたのか、こちらを一瞥し、また虚空を見た。

「リゼ、みんなが来てくれたぞ」

リゼはこちらを見て、それから視線を虚空に戻した。吉岡さんの言つとおり、呼びかけには反応するようだ。完全に閉ざしていた昨日より、まだマシになっているらしい。

「……回復が思ったより早くて、安心したよ」

部屋を出て、みんなにそのことを伝える。緊張も少しだけ緩み、ぼくらは部屋に入った。

「よつす、リゼちゃん」

夏樹が軽快に声をかけた。やっぱり一瞥しただけで、視線は別のところに向けられた。夏樹は少しだけ戸惑ったようだけど、すぐにいつもの調子に戻った。

「今日の拓は大変だったんだぜ？　かなり自虐的で……いてえ！」

余計なことを言う夏樹を小突き、灰谷と細江さんを部屋の中心へと促した。細江さんは、とても悲しそうな表情を一瞬見せた。それは気のせいかと思うほど、短い時間だった。

「シグナルグリーン 虚構殺し　ってのは、ここまでの威力だったんだな。容態の話、大げさなことかと思ってた」

夏樹が柄にもなく、しんみりと言う。

「わざわざそんなこと言わないよ」

「平野、お前のほうは大丈夫なのか？」

「え？」

灰谷は呆れたように嘆息した。

「魔銃の弾丸は、使用者の魔力やら霊力やら、そういう力を消費するからな。結構消費してるんじゃないか、と思ったんだが」

「そうなのか？　拓」

「無理して学校来なくても」

心配そうに、ふたりが聞いてくる。

「いや、確かに撃つた時に、何かが流れてく感覚もあったけど、別に平気だぞ？　そりゃ昨日は少し疲れたけど」

本当にそれ以上の感覚ではない。

「そうか。ならいい。さて……リゼ、お前も大変だな」

ぼくに興味がなくなっただのか、今度はリゼに話しかける。細江さんも、灰谷の後ろからリゼを覗き込んだ。リゼは灰谷の呼びかけに、少しだけ視線を向けただけで、他には何の反応もなかった。

「一応聞えてる。それに、ちゃんと覚えてる」

ぼくの時もそうだった。あの時は返事ができるくらいの消耗だったけれど、ぼくが話していた内容は、ちゃんと覚えていた。

「本当か？ ならちょっとここで話してくか」

夏樹が提案し、誰も反対しなかった。

それからしばらく話し続け、結局、夕食も四人で食べることになった。リゼはゆっくりとしたペースで、それでも自分で食べていた。「そういえば、リゼがぼくに言った言葉は『おいしい』だったんだ」あの時は卵丼を出したのだったか。我ながら、メニューなんてよく覚えていたものだ。

「はは、食いしん坊キャラが定着しそうだな」

夏樹が笑う。

「食べて力を戻すのか、リゼは」

「そうみたいだ」

「吸血鬼でも食べて体力つけるんだね、なんか意外かも」

「ぼくもそう思ったんだけど、まあ同じ生き物だし」

「それもそうか」

「と言っても、健康な状態なら、何も食べる必要はないけどな」

灰谷が付け足した。

やっぱり吸血鬼が何かを食べることは、緊急時の応急処置もしくは、暇つぶしくらいの意味なのだろう。

「なあ、平野」

「うん？」

「リゼに血を吸わせたなら、回復は格段に早くなるぞ？ どうしてそれをしない」

吸血鬼は血を吸う種族。それは当然として、吸血鬼の力の源という意味だ。それを摂取すれば、力の回復が早まるのは当然のことだ。ぼくだって、そんなことはわかってる。

「リゼは今まで、ほとんど人の血を吸ったことがなかったんだ。昨日まで」

だからアイーナの血を吸ったことで、暴走してしまった。吸血鬼

としては、あり得ない理由で。

「二千年ちかくも生きててさ、昨日が一番たくさん吸ったんだろうさ。きつと、今また血を吸わせたら、昨日の二の舞だ」

そうになったら、ぼくはまた、リゼを撃たなければならなくなる。

「そうだったな」

「どうしてリゼは、人の血を今まで吸わなかったんだろうな」

「聞いたことなかったの？」

「ああ。というかな、途中から忘れてたんだよ。違うな、認めてなかったのかもしれない。リゼが吸血鬼だなんて」

理由を聞いておけば、何か変わったのだろうか。そんなわけがない。無駄な、無意味な考えだ。

自然と視線がリゼに向く。

「今だから言えるんだけど、昨日リゼ　君がアイーナの血を吸った時、ぼくは無意識に魔銃を構えかけてたんだ」

リゼが血を吸ったことが許せなかったのか。

吸血鬼であったことを忘れていたのか。

ただ、その存在に恐怖したのか。

ぼくにはわからないし、その全部なのかもしれない。とにかくぼくは、魔銃を構えてリゼを殺そうとしたのだった。まだ暴走する前のリゼを。

ぼくに視線を向け、リゼはまた虚空に視線を戻す。

「わかってても滅入るよな。こういうのも、聞えてるんだろうけど」

「それでもないさ。ぼくは好きで、こいつと関わってるんだからくく、と灰谷が笑う。

「なんだよ」

「虚構と好きでつるむ、か。面白いなやっぱり」

「虚構って言っても、灰谷さんもリゼさんもちゃんというよ？」

「オレたちみたいいな連中の総称だよ、細江。本来、ここには存在しないものだからな」

自嘲気味に笑う。

「授業で習ってる通りさ。オレにもその構造はよくわからんがな」
虚構が世界に顕現する仕組み。ぼくはそれを、すでに知っている。
事件の後、夕食を食べながら、黒木さんから教わった。

「並行世界」
パラレルワールド

「はあ？ と一同がぼくのほうに向く。」

「世界は一つじゃなくて、いくつもある。起源を同じとし、けれど
違った進化、時系列をたどってきた別世界らしい」

「一般的な解釈とは違うんだね」

「ああ。同じ存在がある、ってワケじゃないらしい。似たような存
在はいるらしいけど。で、その世界は全くの別物なんだけど、何ら
かの原因で交わってしまう」

「続ける、と灰谷が促す。」

「交わった世界は存在が交じり合い、お互いの世界にその後遺症を
残す。副産物って言い換えてもいらいんだけど、それが虚構」

「そうして生まれたもの。」

「そうして生まれた存在といっても、元の世界にもいた存在が流れ
込んでくることもある。その存在をAとして、AがBの世界に
流れたとき、AはAが元いた世界から存在がなくなってしまう」

「まあ、そうなるわな」

「そうなったらAの世界の歯車が歪になるから、Bの世界から代替
となる存在が流れ込む。なあ灰谷……お前、前の世界で人化なんて
できたか？」

「ぼくの予想が正しければ。」

「ぼくの予想が正しければ、灰谷は前の世界では、人化はできなか
ったはずだ。」

「できなかつた。こっちの世界に来てからだ」

「案の定、灰谷は首を横に振った。」

「今の灰谷の体はきつと、灰谷がこの世界に来たときに、入れ替わ
った人の体だと思う」

「そう考えるのが自然だ。」

もちろん、これだって確実に正しいと言えるわけではない。あくまでも推測の域はでない。

「じゃあ、オレはもしかしたら、この体だった奴の知り合いに会うかもしれないな」

「そうだな。でも、実際に会ったときの齟齬は大きなものになるから、結局、世界そのものが調整してる可能性もあるって話だけど」

「平野くんって、その話は誰から聞いたの？」

「このアパートに住んでる魔法使いさん」

またみんなの顔が強張る。さすがの灰谷でも驚いたらしい。

「って、灰谷は魔法使いがこのアパートにいるの知ってるだろ」

「いや、そんなことまで知ってることに驚いた」

「何者だよ、その魔法使いさん」

「物知りなお姉さん？」

ぼくにだってよくわからない。黒木さんだけでなく、このアパートに住んでる人たちは、とにかくよくわからない。

京香ちゃんくらいだよな、そんな感情を覚えないの。

「はあ……俺たちが今まで勉強してきたのって、一体なんだったんだ？ 魔法使いさんの話とは全く違うじゃん」

意味が分からないなりにがんばってたのに、と夏樹がため息をついた。

「一つの間想くらいに思っておけ」

「でもさっきの話を聞いたたら、世界学って結構穴が大きいよね」

「というか、根本的に違うだろ。世界学のほうは人間の意識がどうのこうの言ってたけど、その魔法使いさんの話だったらパラレルワールドなんだから」

「だな。世界学で言ってることが、実際におきそうな気がしないでもないけど」

人の意識にそれくらい力があっても、ぼくは不思議とは思わない。むしろ、あって当然だと思う。

「じゃ、オレたちはそろそろ帰るか？」

みんなが食べ終わったのを見計らい、灰谷がそう切り出した。

「あ？ ああ、そうだな。なんか晩飯も食っちゃったし」

「ごちそうさま、平野くん。あ、片付けしないと」

「いいよ、ぼくがするから」

「あ、ありがとう」

「どうってことないよ」

みんなを部屋の外まで送り出し、ぼくは食器の後片付けに取り掛かった。後ろには食べてもあまり回復しなかったりゼが、ぼくのほうに向いていた。それがたまたまなのかどうか、ぼくにはわからなかったけれど、少しだけうれしくなった。

教室にいるはずの生徒が、誰か一人いなかったところで、授業は何の問題もなく、いつもどおりに進む。

石動は学校に来ておらず、その席は空席となっていた。石動が欠席だということに対して、ぼくが何かを思っているわけではない。理由はともかく、原因だけは明らかだ。

「このまま来ないつもりか？」

さすがにないだろうと思いつつも、もしかしたらそうなのかもしれないとも思う。

退屈な授業はぼくにとって苦痛でしかなく、そんな苦痛から逃れようと窓の外を見る。グラウンドには生徒の姿はない。体育の授業がないからだろうが、誰もいないグラウンドというのは物寂しさを覚える。

と。

誰もいないと思っていたグラウンドに、一人の少女が立っていた。制服を着ておらず、明らかにこの学校の生徒ではない。

少女は何かを探しているのか、周囲を見回しながらゆっくりと移動している。

「つつてもここ学校の敷地内だしな……」

日本の学校は、部外者立ち入り禁止が基本である。

「先生、グラウンドに誰か迷い込んでますよ」

「なに？」

報告すると、先生が窓際に立ってグラウンドを見た。

「……職員室に行ってくる。それまでに問題解いてるよ」

先生が至極面倒くさそうに、教室から出て行った。クラスメイトたちは、グラウンドを一度だけ見て、また自分の席に戻った。

「平野」

灰谷がぼくの耳元で、囁くように言った。

「どうした？」

「あの女、あれは虚構だ」

「は？」

「どういう存在なのかは思い出せないが、たぶん無害とは思うがな」
そう言つて灰谷は席に戻り、問題に取りかかった。

もう一度、グラウンドに目を向ける。グラウンドにはまだ少女は立っていて、その少女は校舎を、つまりこちらを向いていた。

目が合った　ような錯覚を覚える。

つう、と目をそらし、少女はグラウンドから出て行つた。

次の授業は何だったかと思ひ出していると、細江さんが声をかけた。
「なに？」

「なに？」

「ん？　なんとなく。昨日はありがとね」

「いや、お礼なんていいよ」

どちらかといえば、ぼくがお礼を言わなければいけないほうだ。

「さっきの人、何しに来てたんだろっね？」

不思議そうに、けれど興味津々といわんばかりに、細江さんは言つた。

「さあ？　風で何かがグラウンドに入ったんじゃない？」

何かを探すような少女の行動。ただ、あの少女が虚構だというならば、そんなことはあり得ない。確固たる目的があつてここに入つてきているはずだ。

「違うと思つけど」

さすがに細江さんも、それは無いと思つたのだろう。

「またあの……虚構つてやつ？」

不安そうに、細江さんは表情を曇らせる。アイーナ・リューゼンディツヒの一件で、虚構に対して恐怖心を抱いているのだろう。

「灰谷が言つにはそうらしいよ」

細江さんは、びくり、と体を震わせた。

「ほら、リゼも灰谷も昨日の吉岡さんも、みんな虚構だよ？ 怖い存在ばかりじゃないって」

はっ、と細江さんは目を見開いて、悲しそうにうつむいた。

「え？ ぼく悪いこと言った？」

「うつん。ただね、わたしって駄目だなんて。灰谷さんやリゼちゃんのこと、勝手に怖がってたみたいで……。すつごく失礼なこと言ったなんて……」

「……………」

こういう時に気の利いたことでも言えたらいいのだけど、ぼくには何も言えなかった。

細江さんは本当に辛そうだった。

何も言ってあげることできないまま時間が経って、始業のチャイムが鳴った。

「平野」

授業の後、山岸に呼ばれ廊下に出た。

「アパートに電話したんだが、リゼには代わってもらえなかった。

あいつが休んでから毎日だ。まあ二日だが。リゼは一体どうしたんだ？ 本当に風邪なのか？」

真剣な山岸の表情。山岸にもこんな顔ができたのかと、ぼくは場違いにも感心していた。

しかし、そんな真剣な山岸にも、本当のことは言えない。言ってしまうてもいいのだからうけれど、ぼくには言う気にはなれなかった。信用とか信頼とか、それ以前の問題として。

「風邪ですよ。ご飯とトイレ以外では寝てますから、きっと電話に出た人が気を使ってるんだと」

納得しかねている様子だったけれど、山岸はうなずいて踵を返した。

少しばかりの罪悪感が胸に残る。けれど、それも仕方のないことだった。

アパートに帰ると、どこかで見たことのあるような、けれど決して知り合いではないと確信できる人影があった。

半袖のシャツに、下着と変わらない程度しか丈の無いショートパ
ンツ。

銀色の髪。

やけに露出の多い少女は、ぼくの気配に気づいたのか、こちらに振り返った。

「君は今日学校にいた……」

見覚えがあるのも当たり前。

その人物は、グラウンドで何かを探しているかのように歩いて
いた少女だった。

近くで見ると、少女はまだ幼く、小学生と中学生の間くらいの顔
立ちだった。灰谷が言うにはこの少女は虚構らしいので、この目測
もあまり意味はないのだろうけれど。

「ぼくは 旋風に生きる者。死にゆく虚構を見定めに来た」

少女 旋風に生きる者 は、ぼくの言葉を無視する形で言っ
た。

「 旋風に生きる者 ？ 死にゆく虚構？ 」

ぼくは無意識の内に シゲナルグリーン 虚構殺し を構え、目の前に立つ人物に向
けていた。

旋風に生きる者 は呆れたように嘆息し、自分の後ろのドアを
示した。

「ぼくは 旋風に生きる者。どうしてこの部屋の中の存在と相容
れて、ぼくとは相容れない？」

そう言われて、ぼくは魔銃を向けていたことを自覚した。いつの
間に構えていたのか、ぼくは覚えていない。

慌てて魔銃を下ろした。

「警戒しなくてもいい。ぼくは 旋風に生きる者。ただの旅人さ」
「死にゆく虚構ってのは、その部屋の中にいるやつのことか？」

聞くと、 旋風に生きる者 は部屋のドアを一瞥し、うなずいた。

てみても、返事は無かった。

「いないか」

もしかしたらと思ったけれど、まだ大学から帰ってきていないようだ。

一階に降り、黒木さんの部屋に向かう。

やっぱりいなかった。

吉岡さんも千堂さんと同じ大学だったはずだ。専攻が違うから帰っているだろうか。

「吉岡さん」

ノックをしながら声をかけてみる。

返事は無かった。

残ったのは人影兄妹だけだが、宗次は働いているし、京香ちゃんも中学生。果たしているだろうか。

ノックをすると、意外にもドアが開けられた。しかもドアを開けたのは宗次だった。

「どうしたんですか？ 珍しいですね」

「ちょっと聞きたいことがあって」

宗次は少し考える素振りを見せ、

「とりあえず上がってください。京香、お茶を」

と、ぼくを部屋に入れた。

京香ちゃんも帰ってきてるのか。そういえば部活とか入っていないかったつけ。

小さなちゃぶ台で対面するように座る。

「はい、拓さん」

京香ちゃんがお茶をぼくの前に置く。

「ありがとう」

三人分のお茶をちゃぶ台に置き、京香ちゃんも座った。

「で、聞きたいことというのは？」

少し深刻そうな雰囲気醸しながら、宗次が聞いてきた。

「いや、そんなに深刻な話じゃなくて……宗次と京香ちゃんは 旋

風に生きる者 　って知ってる？」

「あたしは知らないなあ。お兄ちゃんは？」

宗次は目を閉じ、記憶を探っていた。

「それなら聞いたことがあります。けれど、どうしたんですか？」

突然

「さつきりぜの部屋の前に　旋風に生きる者　を名乗る女の子がいたから、ちよつとね」

見定める、とか、そういうことは言わなくてもいいだろう。宗次はともかく京香ちゃんがそういう行為に反発を覚えるだろう。

救つかどうかの見定め、など。

「そうですね。なるほど」

宗次の目が細められる。

「何がなるほどの？」

「何でもありませんよ。それより、　旋風に生きる者　ですね？」

宗次はその存在について知っているだけに、もしかしたら推測が立ったのかもしれない。宗次は口を閉じた。

宗次はお茶を一口飲んでから、それについて話し出した。

「　旋風に生きる者　というのは、ある種族の名前です。団体行動はとらず、夫婦や幼子でもない限り単独で行動します」

さつきあの少女が言っていた言葉を思い出す。「ぼくは　旋風に生きる者　。ただの旅人さ」とはこのことか。

「　旋風に生きる者　は一人前になると旅をします。親許を離れて、自分が新たに根を張るための旅です。自分に見合う土地が見つければ、その地で一生を過ごします。　旋風に生きる者　は争いを好む性格ではありませんが、それなりに高い戦闘力を持っています。まあ、吸血鬼やドラゴンには到底及びませんが」

比べる対象がおかしいと思っただけれど、思えばそれに匹敵するよ　うな　敵　が現われたのも事実だった。

「　旋風に生きる者　が何の目的でりぜさんの部屋の前に立っていたのかはわかりませんが……」ここには明らかに嘘が混じっていた。

表情では、宗次はその目的を確信していた。「……その人物が有害だと確信できるまでは友好的に対応してみるものいいかもしれませんよ。旋風に生きる者は付き合ってみればとても穏やかな種族と聞きますから」

穏やかな種族。

そういえばそうなのだろう。

彼女と対峙した時、ぼくは全く敵意も殺意も感じなかったし、そもそも好意すらも感じなかった。友好的とか排他的とか好戦的とか、それ以前に、彼女、少なくとも今日来た彼女は、他人に対して積極的な感情を抱かないのではないだろうか。

「今日来たという 旋風に生きる者は恐らく明日にでもまた姿を現すでしょう。その時にでもその人と話をしてみてください」

「そうすることにするよ。……悪かったな、突然押しかけて」

宗次に謝りながら立ち上がる。

「気にしないでいいですよ」

微笑み、宗次も立ち上がった。京香ちゃんも宗次に続いて立ち上がる。

「それじゃ」

「はい、またいつでもどうぞ」

休み時間。

授業はあまり集中できなかった。アパートに帰れば昨日の少女が待っていることは想像に難しくなく、どういう風に接していいものかわからない。まず話をしてみる、と宗次は言ったけれど、何を話したのかもわからない。

「どうした？ 難しそうな顔してよ」

ため息をついたところに夏樹がぼくの背を叩いた。

「別に……。なあ、夏樹。お前ならあまり親しくない女子とどんな話をする？」

「あー……。あー……。って、お前それはどういう状況だ！」

急に怒鳴ってぼくの肩をつかむ。そしてそのままガクガクとぼくの肩をゆすった。

頭が揺れて視界が定まらない。

「おま、お前って奴あ、リゼちゃんというものがあーあーあーあー！」

と、的外れなことを叫びだし、それを聞いたクラスメイトたちが「なんだなんだ」と集まり始めた。

……。どうでもいい時だけ結束力があるクラスだ。

「誰だよ、どこの子だよ、どんな子だよ！」

周囲も気にせず夏樹が叫ぶ。

「とりあえず、その手を止める」

ハッ、と我に返って夏樹が手を止める。代わりに肩をつかむ力が強くなった。

わらわらと集まってきたいるクラスメイトたちは好奇の目をぼくに向けている。

「平野に春が……」

「さてさて、リゼちゃんの時点ですでに春だろ。てか夏真っ盛りだ

る」

「キーツ！ リゼっちだけじゃ飽き足らず他の子にまで！」

「平野くん！ どんな子なの！」

……。

勝手に盛り上がったっていくのは勝手なのだけど、どうしてそういう話になるんだ？ ぼくは一言も気になる子がいるとか、そういう話はしていないのに。

というか、リゼっちって誰が呼んでるんだ？

「拓よ。なあ、拓。その子について詳しく話せ」

夏樹がかなり真剣な表情で（久々に見た。まだ三回も見えてないと思う）、ぼくを問いただす。

「ごくり、とクラスメイトたちが唾を飲んだ音が聞えた気がした。

「とりあえず、どういう脳内回路を所有してたらこんな話に話が飛躍するのかをまず聞きたい」

「親しくない女子とどんな話をするかが知りたいとか、明らかに『そう』だろ！」

夏樹が言う。とりあえず顔が近い。

「そんなもんか？」

「そんなもんだ。いいから、まず外見的特徴を挙げろ」

有無を言わせぬ、ぼくが回答以外のことを言うことを許さない語気。クラスメイトたちから発せられる雰囲気も、それと同様のものだった。

仕方がない。

当たり障りの無い部分だけを教えることにしよう。

「年齢はわからないが、ぱつと見だと小学生から中学生だ」

不自然に周囲がざわめきだす。

「身長はぼくの鳩尾くらい。髪の毛の長さは肩くらいまで。髪色は銀。

銀髪ははじめてみたけど、想像以上にきれいだった。半袖にショートパンツ。パンツのほうは丈が異常に短かった。外見的特徴を言う

ならこれくらいでいいだろ？」

ざわざわ。

ざわざわと、集まった野次馬たちは落ち着きがない。はじめからないけれど。

「そ、それで、性格的には？」

「性格はよくわからない。大体、昨日会ったばかりだ。……そうだな、一人称は「ぼく」で口調はかなり淡々としたものだな」

「ぼ、ぼくっ子」

どこからかそんな声が聞えた。

「ロリコンでぼくっ子趣味……」

「平野くん……」

「……そっか、リゼちゃんみたいなかawaiiさよりも、ロリィなほうがいいんだ」

クラスメイトたちからそんな声もれる。

残念そうで同情するような、重苦しい口調だ。

「待て！ ぼくはそんなことを言っていないだろ！ そこ！ 後ずさりをするな！」

大体、あの少女からはそんな印象は受けない。

「拓、俺はいつまでも友達だぜ？」

哀れむような夏樹の声。

「黙れ！」

この教室内では考え事はしないようにしよう。

「よう」

アパートのリゼの部屋の前。まるでぼくを待っていたかのようにドアにもたれていた少女に声をかける。

「どうも」

もたれるのをやめて、数歩こちらに近づいてくる。

「とりあえず 旋風に生きる者 っていうのがどういいう種族なのか、っていうのはわかったよ」

「それはよかった。なら、ぼくがこの中にいる虚構に対して、敵意も好意もなにもないこも分かってもらえているはずだね？ 中の虚構に会わせてほしい」

相変わらず言葉に起伏はない。

「一応聞いておくよ。どうして？」

「ぼくは 旋風に生きる者。この中にいる虚構を見定めに来た」
それだけを言い、 旋風に生きる者 はじつとぼくを見つめる。

ぼくはリゼの部屋のドアを開け、中に少女を入れた。

旋風に生きる者 は当たり前のように部屋の中へと足を進め、
リゼが小さく足を抱えている部屋の隅へと進んだ。

リゼの視線が少女を見据え、すう、とまた虚空に戻った。

「ぼくは 旋風に生きる者。知っているかな？ ぼくは風に生きる者。ねえ、鮮血に生きる者。君は確かに鮮血に生きる者のはずなのに、血のおいが薄いね。死にゆくにおいがするよ」

血のおいが薄いのは、リゼが今までたった一人 あの召喚師の血しか吸っていないからか。

それともそれはだたの比喩なのか。

どちらにしても、あまりいい状況ではないだろう。

「なあ」

「？」

旋風に生きる者 がこちらを向く。

「『死にゆくにおい』って、こいつは死ぬのか？」

回復しているとはかり思っていた。

少しずつでも。

「今回は生き残るかもね。何度も繰り返すと死んでしまうよ」

「……！ 本当か？」

「ぼくは 旋風に生きる者。 unnecessaryな嘘はつかない」

まっすぐにぼくを見据える目。

「君は、助けられるのか？」

「ぼくは 旋風に生きる者。それを見極めるために、本来そっい

う義務は無いけれど、それを見定めるためにここに来た」

「見極めるって！ どうしてそんなことを、試験みたいなことが必要なんだ！」

助けられる命なのに。

今回は助かってても、消耗していくものなのに。

どうしてそれを助けるのに試験が必要なのだろう。

詰め寄ろうとしたぼく、しかし、少女はそこにはいなかった。

「！」

「ぼくは 旋風に生きる者。風とぼくは同一にして異なるもの。

この世のあらゆる有象無象は、ぼくを捕らえることはできない」

後ろから声がかして、ぼくは慌てて振り返る。

「また、会いに来る。鮮血に生きる者。それから 虚構を殺す者」

少女はドアから何事も無かったかのように出て行ってしまった。

「お、ロリ野」

教室に入るなり、夏樹が気さくに殺意のわく挨拶をしてくれたので、ぼくは気さくに殴ってあげた。

「ぐぼおあ」

夏樹は呻きながら地面に両手をついた。

「く、強くなつたな……ログア！」

何か言いかけた夏樹の腹を蹴る。ぐぬおお、と呻いているけれど、ぼくにはなんの感情もわかなかった。

「よお、夏樹。元気そうだな」

「あ、あ……ああ。よう、拓」

「平野くん、おはよ」

「おはよう、細江さん」

「何してるの？ 足立くん」

一部始終は見ていたはずなのに。

細江さんも案外鬼だった。

昼食は珍しく四人となった。いつもは灰谷か細江さんのどちらかが欠けるのだが、欠席のリゼを除いて全員が揃った。

「そういえば灰谷さんとお昼食べるの初めてだね」

「うん？ ああ、そうだな。あまり話す機会もなかったしな」

そういえばそうだな。先月の林間学校の夕食も、ついたテーブルこそ同じでも話していなかったように思う。細江さんはなんだかんだ言いながら、女子グループとの付き合いもちゃんとしているし。

「細江は友達が多いからな」

「灰谷さんだっっているでしょ？」

「オレにはここにいるメンバーとリゼくらいしかいない」

男のような言葉遣い。

かわいいというよりも男前。
言葉の所々に棘を感じさせる。

それが灰谷に対するクラスのイメージ。
断崖に住む存在。

高嶺の花、ではないけれど。

「ここにいるメンバーってことはわたしも入ってるんだよね？」

にこにここと、細江さんが灰谷に聞く。

「そうだな。細江がそう思うなら、オレと細江は友達だ」

「素直じゃないよな、灰谷は」

夏樹が笑い、灰谷は「ふん」と鼻で笑った。不思議と、その笑いは嫌な感じがしなかった。

「なんだ、その顔は。平野、お前だってオレと同程度に友達はいないだろ」

「いや、まあ、一応ぼくにはアパートの人たちがいるから」

あれ？　そういえば黒木さんはあのアパートのことを「虚構の為のアパート」と言っていなかったか。どうして灰谷はあのアパートに住んでいなかったのだろう。

まあ、その必要がないだけなのだろうけど。

「ああ、なるほどな。オレもあのアパートに住めば、友人は増えるかな？」

呟くように灰谷は言った。

「は？」

「え？」

「はあ？」

「嘘だ。そんなに驚くな」

灰谷はぼくらの驚き方に驚いたようで、呆れたように笑った。

細江さんが心底ほっとしたように息をついたのが、ぼくは不思議だった。灰谷がどこに住もうが、細江さんには直接関係ないだろうのに。

そろそろみんなが弁当を食べ終えようかとしていた時、柔らかな風が吹いた。

懐かしいような感覚。

そして、ぼくは最近こんな風を受けたような気がする。

「やあ。虚構を殺す者。大空を統べる者。それから学問に生きる者たち。ぼくは 旋風に生きる者。風に生きる者。よろしく」

明らかに高校生ではない、私服の少女が立っていた。

一番に口を開いたのは夏樹だった。

「え、嘘、あれ？ この子、拓が言ってた子？」

「ああ」

旋風に生きる者 は流れるような動作でベンチに座った。

あまりに自然な動きで、誰もそれに対して何も言えなかった。

ここは一つのテーブルを四方から囲む形になっていて、ぼくたちは向き合うように座っている。 旋風に生きる者 はぼくら全員が見える位置、つまり誰も座っていないベンチに座った。

「どうしてここに来たんだ？」

「ぼくは 旋風に生きる者。死にゆく虚構がどういった存在だったのか、少なくともこの場においてどういう存在だったのか、それを聞きに来た」

「死にゆく、虚構？ 何の話？」

細江さんが聞き返す。

「鮮血に生きる者の話」

「リゼ、ちゃん？」

「リゼという名か」

「おい、お前の名前はなんていうんだ？ まず名乗れ。それからでないと信用できない」

灰谷が厳しい口調で 旋風に生きる者 に言い、睨むような視線を向ける。

「ぼくは 旋風に生きる者」

「それはお前の種族の名だ。お前個人の名前を聞いている」

「名は魂を知る道しるべになる。ぼくは 旋風に生きる者。易々と本名は教えられない」

淡々と、灰谷から発せられる威圧感など全く気にした様子もなく、旋風に生きる者 は受け流す。

「だったら適当な偽名を言え。毎回『お前』とか『 旋風に生きる者』と呼ぶのは面倒だ」

少女は考えるようにうつむき、それから顔を上げた。

「ぼくは両親からリンクスと呼ばれていた。呼ぶならそう呼んでくれていい」

「な、なあ」

おずおずと夏樹が手を挙げる。リンクスと名乗った少女は、夏樹に視線を向けた。

「質問なら受け付ける」

「その 旋風に生きる者 とか死にゆく虚構とか、話が見えないんだが」

「これから説明する。大空を統べる者も聞いておいてくれ」

「灰谷琴音だ」

ぶつきらばうに灰谷が訂正を入れる。

「ぼくは 旋風に生きる者。鮮血に生きる者 死にゆく虚構を見定めに来た。本来このような義務は無いが、気まぐれのようなもの」

灰谷の訂正を無視する形でリンクスは語りだした。

「見定める上で、死にゆく虚構を判断する上で、まず虚構を殺す者に接触した。今度はその次に近い者たちの番だ。リゼという名のあの存在は、どういった存在だった？」

どんな存在だったか。

彼女と出会って、まだ一ヶ月前後。

そんな人間関係の核心に迫るような質問に、果たしてぼくたちは十全な答えを出すことができるだろうか。

「リゼちゃんはね……」

小さな、消え入りそうな声。

「リゼちゃんは、わたしたちの友達」

リンクスは続ける、と言わんばかりに視線を細江さんに投げかける。

「リゼちゃんが吸血鬼だつてこともわたしたちは知ってるけど、それでも友達つて胸張つて言えるよ」

「オレもそうだな。リンクスちゃん、そもそもオレたちはリゼちゃんを助けられるなら『見定める』なんてことをしない。リゼちゃんだけじゃない。仲間を助けるためならこの身すら投げ出そう」

リンクスは表情を変えずに座っていた。けれど、まぶたを閉じ、何かを考えるかのように、何も言わなかった。

「旅人つていうくらいだからいるんな場所行ってきたんだろ？ 仲間見捨てるような奴なんて、今までいた？」

リンクスは小さく息をつき、すう、と立ち上がった。

「よくわかった。虚構を殺す者。お前がアパートに戻った時、ぼくが出した答えがわかるだろう」

「……………」

リンクスはぼくたちに背を向けて歩き出した。

「ぼくは 旋風に生きる者。旅人は常に関係に飢えている」

少しだけ振り返り、寂しげな微笑を見せた。

そんな気がした。

ぼくたちは学校が終わった直後、飛び出すように教室を出た。相変わらずというか、やっぱりというか、灰谷だけは落ち着いたものだった。

今回、たとえリンクスがリゼをどういう方法かはわからないけれど、とある方法で救わなかったところで、リゼがそのまま死んでしまうということではないのはわかる。リンクスもそういう風なことを言っていた。

しかし、それでも期待はしてしまっ。

帰ればリゼに何らかの変化が起きていることを。

リンクスが何らかの働きかけをしていることを。

アパートが見えてきた。今までこんなに早くここまで来たことはなかった。それ夏樹と細江さんの息の切れ方が物語っていたがし灰谷は当たり前のように、息を切らしていない。体力は人間のそれとは比較にならないということが。

リンクスはいなかった。

てつきり部屋のドアの前で待っているものだと思っていたが、見回してみてもそれらしき人影は見えない。

「リゼちゃんは……」

ドアの前に立ち、ぼくたちは怖気づいていた。

開けたとき、何の変化も無かったのならリンクスは何もせずに戻ってしまったということだろう。

「帰ったときには、つまりもう、結果は出てるんだよな」

「ああ」

「平野くん」

「わかつてる。みんなはここで待ってて」

ドアを開ける。

「ぼくだ」

数歩歩くと、奥から人影が飛び出してきた。

「！」

人影はぼくに飛びついてきて、ぼくの体を抱いたまま嗚咽を漏らした。

「リ、リゼ」

「ご、ごめ、んな……さい」

「な、何を謝ってるんだよ？ 君がぼくに謝ることなんて何もないぞ？」

謝らなければならぬのは、むしろぼくのほうだ。

リゼをあんな状態にしたのは ほかでもなくぼくなのだから

ら。

リゼは感情に任せてぼくを抱きしめてくる。

ぼくはそんなリゼにどんな対応をしたらいいのかわからない。

「だって……だって、わたし、タクを殺そうと……」

「あれは自我が無かったんだろ？ 吸血鬼の血が暴走しただけじゃないか。リゼが責任を感じるんじゃないよ」

自然とリゼの頭をなでていた。

こんなことで落ち着くとは思わなかったけれど、思えなかったけれど、リゼの感情の高ぶりを少しでも抑えたかった。

みつともなく泣きじゃくるリゼ。

吸血鬼の王族。

そんな風には見えなかった。

ただ一人の女の子。

そんな風に見えた。

「泣かないでくれよ。泣かないで」

「う、うぐ……」

言葉すら。

嗚咽の中に消える。

ドアのほうに視線を向ける。

さっきまで、少なくともぼくがリゼに飛びつかれるまではいたはずの三人は、いつの間にかいなくなっていた。

気を利かせてくれたのだろう。

心配で来てくれたのに。

「リゼ、大丈夫か？ どこか痛いところとか、変なところないか？」

リゼは泣きながらぶんぶんと首を振って、顔をぼくの胸にうずめた。

やがて、もしかしたら一時間ぐらいこうしていたかもしれないと思うほどには時間が経った頃、リゼがぼくから一步離れた。

「ごめん」

「落ち着いた？」

「こくん、と気まずそうにうなずいて、上目遣いでぼくをみつめる。

「とりあえず、入って？」

「ああ」

リゼの部屋には必要だからか机や机に類するものは存在しない。適当な場所に座って向き合う。

「さつき…… 旋風に生きる者 っていう子が部屋に来たんだ」
来てくれたんだ。

「その子はわたしの後ろに立って、何かをしたと思うんだけど、したら『ぼくは 旋風に生きる者。この町にしばらく滞在するから、見かけたらよろしく』なんて言って、部屋から出ていつちやっ」
た」リゼは不思議そうに首を傾げた。「不思議なのは、あの子が部屋から出ていって少したら、いきなり力が湧いてきたんだよね」
「そいつはリゼを助けに来てくれたんだよ」

「え？」

簡単にリゼに説明をする。

話し終えると、リゼは何度もうなずき、何か言いたげな顔でぼくを見た。

「どうかした？」

言いにくそうに、なぜか赤面しながら、リゼは上目遣いにぼくを見た。

「ねえ」

「うん？」

「もう一回、抱きしめて」

リゼの顔は真っ赤になっただけで、それはぼくも同じだった。胸の鼓動だって、さつきまでとは打って変わってフル稼働状態になっている。

「あ、ああ」

そう言うのが精一杯だった。

真っ赤なりゼを抱き寄せる。

今までそんなことはなかったけれど。
なかったと言いつれるのだからけれど。
この時。

ぼくはリゼを好きになった。

5 (後書き)

第一話『風の旅人』
これにて終了です。

次回、閑話『リーゼ・ブリュスタンの休日』
お楽しみに。

リーゼ・プリュスタンの休日

コトネとヤエに連れられ、わたしはケイタイショップというところになんてやってきていた。

わたしのケイタイ選びを手伝ってあげてほしい、とタクから連絡が入ったらしい。本当はタクと来る予定だったんだけど、吉岡さんがどうしても手伝って欲しいと頼んできたらしく、そちらのほうに行ってしまった。

「リーゼちゃんはどうなのがいいかな？」

「どんなのって言われてもわかんないよ。そもそもケイタイって持ってたほうがいいの？」

わたしにはケイタイの便利さはわかってても、本当に必要なかはわからなかった。わたしはただ、先月、ヨウヘイとみんながアドレスというものを交換しているのを見て興味を持っただけだった。

「必須というわけではないが、持っていたほうが何かと都合がいいな。この前みたいなのもある」

コトネの言う『この前みたいなこと』というのは、当然あの事件のことだろう。たしかにあの時は、ケイタイというものでタクはみんなと連絡を取り合っていた。

「そうでなくても、ちょっとした連絡に使えるからな」

「そだね。それにさ、この世界じゃあ携帯のアドレスの交換って友達になる第一手みたいなのところもあるんだよ」

ヤエが教えてくれる。

「そうなんだ。ね、ヤエはどんなの使ってるの？」

ヤエが取り出したのは、赤色の四角いものだった。飾りらしきものが二個ついていて、それが本体と当たって音がした。

「オレはこれだ」

コトネが取り出したのには、そういう飾りらしいものはないしなかった。店のカウンターに置かれているものにも飾りはついてい

ない。

「ヤエ、その飾りがついてるのは、何か特別なものの？」

「え？ あ、これはストラップって言って、お店で売ってるやつなの。つけないなら後で見てもよ」

「じゃあ、コトネはつけてないだけなんだ」

コトネはうなずいて、ケイタイをポケットにしまった。

「オレはあんまりそういうのはつけたくないんだ」

「かわいいよ？」

ヤエがストラップのついたケイタイをかざす。

「邪魔だろ？」

ヤエは「そうでもないよ？」と、苦笑した。

わたしはとりあえずカウンターに並べられたケイタイを一つ一つ見ていく。正直、見た目こそ違うものの、結局どういう風に違うのかはわからなかった。

……値段、適当なのかな？

「ヤエ、これとこれはどう違うの？」

デザインが気に入った二つの違いを聞いてみる。

値段はどちらも同じくらいだった。

「えっとね……」

「そっちの青いのはカメラの画素が多い。つまりきれいに写るってことだ。あと、その携帯は音質と画質が非常に高いな。良質だ。ただし、バッテリーの消費が大きいのがネックだ。他にも様々な機能がついていて、この春の人気作だ」

すらすらと、ヤエが驚くほど滑らかに、コトネがケイタイについて語りだす。

「こっちの黒いのは生活防水が施されていて、ちょっと濡れたくらいでは壊れない。カメラの画質は中程度。もともとはもっと値段は高かったが、新機種が出て値引きされている」

「灰谷さん、くわしいね」

「まあな」

少しバツが悪そうにコトネは頭をかいた。

「うーん、使いやすいのはどっちかな？」

「それは個人によって違うな。ま、リゼは初めてだからこの黒いやつがおすすめだろう」

水に濡れても簡単には壊れないからな、とコトネは続けた。

「色が気に食わなかったら、ほかにも色はある。見てみるといい」

店員さん呼んで、他の色を見せてもらった。

わたしは生活防水とやらがついていているらしい黒いケイタイを購入し、色々な手続きを済ませてお店を出た。

「ありがとね」

「どういたしまして。あ、リゼちゃん、早速アドレスをあげよう」

ヤエがケイタイを開いてわたしに示した。

「登録の仕方、教えてあげる」

「待て。それをするならあの店に入ろう」

コトネが指さしたのは、シックな雰囲気のお茶店だった。

「で、そこを押す」

「ここ？」

「そうそう」

「待て、そこ、知らない文字が入ってるぞ」

「あれ？ほんとだ」

「これで消して、そう」

「じゃあ、これでいいかな？」

「よし、ここにあわせて……」

「あ」

「あ」

「？」

ふたりが素っ頓狂な声をあげる。

「お前、さっきのもう一回やり直しな」

「ええ！」

「このボタン触っちゃたんだね……」

ヤエが示したボタンには『電源』という文字が書いていた。

「？」

「これはな、基本的に今している作業を中断して最初の画面に戻るボタンなんだ。で、ほとんどの場合で、作業は初期化される」

「！」

「がんばろうか……」

暗澹たる気持ちで、わたしはケイタイの操作を再開した。

喫茶店を出たあと、わたしたちはしばらく遊んでから別れた。

「ありがとうね」

「壊すなよ」

苦笑交じりにコトネが言って、ヤエがそれを聞いてまた苦笑していた。

「平野ともちゃんとアドレス交換しておけよ」

「え？ あ、うん」

声が上がってしまった。

「？」

ふたりが不思議そうに顔を見合わせていたけれど、わたしは「なんでもないよ」と誤魔化した。

「誤魔化せてないからな。なんだ？ 平野と何かあったのか？」

「う、ううん。何にもないよ」

ヤエは特に何も聞いてこなかったけれど、何かを聞いたそうにしていた。

「ほんと、本当に何もないから」

わたしは逃げるようにその場を後にした。

リーゼ・プリュスタンの休日（後書き）

どうも。

次回、第二話 イタズラな悪意

お楽しみに。

0 (前書き)

誰でも一度は……無意識のうちに人を××××するものです。

リゼが力を取り戻し、学校に復帰してから数日が経った。石動は相変わらずで、もう学校を辞めるんじゃないかと噂されている。

ともあれ、学校に復帰したリゼは当初、みんなからの質問攻めを受けた。「大丈夫なの?」「もう平気?」という同じ質問に何度も何度も答えたのだった。

そのリゼは今、授業中でもないのにぼくの隣に座っている。ぼくは昨日やり忘れていた宿題をしているのだが、リゼはそれを見ているらしかった。何が面白いのかはわからなかったけれど、ぼくとしても悪い気はしない。

「タク、そこ間違ってるよ」

「楽しげにリゼが言う。」

「え? ああ、本当だ」

指摘された箇所を直し、次の問題に取りかかる。リゼは成績優秀で、宿題なんて問題を見た瞬間に解いてしまっている。問題を解く形式ではない宿題はできないのか、ということとそんなわけもなく、あつという間に終了させてしまう。とにかく優秀だった。だから、リゼが休んでいる間に出されていた課題などはもう全てが終わっている状態だ。

問題が一通り終わって、ぼくは両手を挙げてのびをした。

「ん?」

たまたま視線の先にあった教室の出入り口、そこに細江さんが立っていて、ぼくと目が合ったかと思うとどこかに歩いていってしまった。そういえば最近、朝に細江さんと話すことないな。それに休み時間に話すことも少なくなってきた。

「どうしたの?」

「あ、いや、なんでもない」

多分気のせいだろう。別に毎日話さなければいけないってことも

ないのだ。ぼくにはぼくの、細江さんには細江さんの生活がある。
さあ、今日も退屈な学校生活を送るとしよう。

廊下を歩いていると少し前を細江さんが歩いているのを見つけた。特に用事もないのだけど、どこか疲れているように見えたので小走りで近づく。

「細江さん、どうかした？」

突然声をかけられ驚いたのか、細江さんはビクリと肩を震わせた。
「ひ、平野くん、どうしたの？ 急に」

「いや、細江さんがちよつと体調が悪そうだったから」
顔色は悪くないのだけど、どこか表情が暗い。いつもの快活さが感じられないのだ。

「そう？ そんなことないと思うよ？」

それでも細江さんはそう言っただけで笑った。

「本当に？」

「うん。大丈夫。それよりリゼさんと一緒じゃないんだね」

自分の体調より、ぼくがリゼと一緒にいないことのほうが重要なのだろうか。

「まあ、いつもいつもべつたりってわけじゃないからね」

「そうだよ」

細江さんはどこか気まずそうにうなずく。

「ぼく何か悪いこと言った？」

「え？ そんなことないよ。ちよつと気になっただけだから」

なんで、とはさすがに聞かなかった。あまり触れられたくない、というような空気を細江さんは出していたし、ぼくもあまり聞きたいとは思わない。

「じゃ、じゃあわたし、行かなくちゃいけないところあるから」

「あ、ああ。じゃ、また後で」

「うん」

まるでぼくから逃げているかのように、細江さんは走っていった。

昼食も、当たり前前と言えば当たり前前なのだが、細江さんの姿はなかった。今日はリゼと夏樹とぼくの三人。

そろそろ梅雨が来て、ここでの昼食もできなくなるだろう。別の場所、考えておかないと。

「なあ、夏樹」

「あん？」

「最近細江さんの様子が変わるんだけど、何か知らないか？」

見たところ、細江さんは灰谷や夏樹、クラスメイトたちとはいつもどおり話しているようだった。どうやらぼくに対して気まずさを感じているらしい。

原因はさっぱりわからない。

「どう変なんだよ」

夏樹は理解できないとばかりに食パンをかじる。ちなみにジャムやマーガリン、バターなんてものは使用しない。そのままだ。

「なんかぼくと話すときに様子が変わるんだよ。特に何があったってわけでもないのに、気まずく思ってるっていうか……」

「わたしに対してもそうかも。ヤエ、最近ちょっと変だよな」と、リゼもうなずいた。

「ふうん？ まあ、それは俺から言うことじゃないな。そういうことは俺に聞くより、細江本人に聞いたほうがいいぜ？」

「それだけど、聞いてみたけどなんとも言ってくれないんだよ。なんでもないって言ってさ」

「チツ、細江のやつ……」

「？ ナツキ何か言った？」

「いや？ こっちの話。俺が言えるのは、これは細江の問題ってことだけだぜ？ その内、どんな形かは知らんけど、細江本人から聞かされると思っぞ」

そうなのだろうか。なんだか、夏樹の言うとおりのような気もするし、このまま放置することでもっと悪化するような気もする。

結局、それすらも細江さんの問題なのだろう。

ぼくの問題、なのだろうか。

「お前にきつかけがわからないんなら、そりゃあ細江の問題だろ。

細江が解決すべきモンだ」

「ナツキは相談に乗ってあげないの？」

「あいつが俺に相談を持ちかけてきたら、そりゃあ相談には乗るぜ？　ただ、俺は自分の目的以上のことをしない主義だからな。自分からは動かない。今、俺には細江を助けるという目的なんてないよ。リゼには夏樹の言葉が意外だったのか、少し不満そうな顔になった。」

「友達でしょ？」

夏樹は力強くうなずいた。

「ああ、もちろん友達だぜ？　細江もりぜちゃんも拓も灰谷も」

「でも、助けてあげないの？」

「ああ」

「どうして？」

「助け合うならいいんだ。相談にのってやるのもいい。のってもらうってのも大いにありだ」

夏樹はずい、と身を乗り出した。

手にした食パンが、夏樹の放つ迫力を軽減させているのが惜しい。けれど、甘えるのはいけない。少しならいいぜ？　誰だって甘えたいことくらいあるさ。でも、自分でしか解決できないことを、他人任せにするのは駄目だ。今の細江はそういう立場なのさ」

乗り出した身を元に戻し、パックのコーヒーを飲む。

「わかってくれた？」

しびしびといった風に、リゼはうなずいた。

「そりゃよかった」

細江さんの問題、とそう断定するならば。

ぼくにも誰にも、どうにもできない。

リゼが　を退けたことも。

灰谷が竜殺しと休戦したことも。

どれも彼女たちにしか解決できなかったし、事実、彼女たちは自分の力で解決した。その両方にぼくは立ち会ったけれど、ぼくがしたことなんてそれこそ、事態の観測くらいだ。少し前に会ったリンクスでさえ、リゼを助けたのは最終的に自分の意思だった。

誰も人の所為にはしていない。

リゼを魔銃で打ち抜いたぼくでさえ、それは同じだ。ぼくは決して、そもそもの事件の原因であるアイーナに責任があるとは思っていない。

でもやっぱり、明日もう一度聞いてみよう。それでも何も話してくれないのなら、それはやっぱり彼女が解決しなければならぬ問題なのだから。

「ねえ、ホントに付き合っていないの？」

昇降口から出ようとしていたところに、クラスの女子が聞いてきた。ぼくとリゼは顔を見合わせ、首を振った。

「そっかあ。なんだか意外だなあ」

誰だっけ、この子。同じクラスっていうのは覚えてるのだけど。

「どうしてそう思うの？ カナ」

そうだ、伊藤佳奈さんだ。さすがリゼだ。クラスメイトの名前もちゃんと覚えている。

「うん？ だって最近とっても仲いいし、はた目から見たらもしかしたらそうなのかなあって」

伊藤さんは興味津々といった風にぼくに顔を寄せてきたけれど、飽きたのかぼくから顔を離れた。

「もし付き合い始めたら教えてねえ」

伊藤さんは楽しげに手を振りながら走っていった。よくわからない人だ。

「帰ろうか」

「そだね」

さつきまでのことは無かったことにした。

歩きなれた道。いつも一緒に帰るリゼ。それはどうしようもなく日常的なことで、それはリゼが力を取り戻した日から変わっていない。ぼくは変化を求めていないし、きつとりゼだって変化は望んでいないだろう。

結局、ぼくは何の覚悟も無いのだ。

リゼは不老不死で、ぼくは脆弱な人間。同じときを過ごせるのは数十年という短い時間で、リゼはぼくが老いていく過程を若い姿で見る。今のぼくにはそれが耐えられないし、できることなら、今すぐにだってこの現実から逃げ出したいくらいだ。今はまだいいけれど、もうすぐ、あと数年もすればその問題は顕著になってくるだろう。

リゼだけじゃない。ぼくはあのアパートのみんなとは、同じように年を取れない。いや、黒木さんとは同じか。人影兄妹はどうだろう。『鏡の向こう側』を具現化した概念个体。黒木さんは限りなく人間だと言っていたけれど、どの程度まで人間なのかはわからない。千堂さんなんて言うに及ばず、カマイタチという吉岡さんの寿命はよくわからない。

ぼくはきつと、あのアパートでは二番目に早く死ぬ。だからどうかというわけじゃないけれど、なんだか寂しい話だ。

「ねえ、タク。最近よく聞かれてるあの『付き合ってる』ってなに？」

「今日の献立は？」と聞くように自然体で、本当にその言葉の意味がわかっていないらしい。ぼくはというと、まさかりゼからそんな質問がくるなんて思ってもいないわけで、ぼくは驚いて言葉を失った。

「いや……え、リゼ、本当にわからない？」

「うん」

うなずく。知っていて知らない素振りをしているような雰囲気は感じられなかった。

自然とため息が出る。これから説明しなければならぬことは、どうも説明することに抵抗がある。決して悪いことでもないし、説明することによって何かしらの影響があるわけでもないのだけど、気が進まない。

いくら気が進まなくても、興味津々な顔でぼくを見つめるリゼを誤魔化すよりはマシだろうと、ぼくは説明を始めた。

年齢はどうあれ、外見は同年代の女の子にどうしてこんなことを説明しなければいけないのか、ぼくにはどうしても不思議だったけれど。

アパートにそろそろ着くかというところで、ぼくはリゼに対する説明を終え、小さく一息ついた。

「じゃあ、わたしたちはみんなから『付き合ってる』ように見えるんだ？」

「ま、まあ、そうなんじゃない？」

ぼくだってそれを意識してないとは言わない。リンクスによってリゼが救われたあの日以来、ぼくたちはぼくが自分で意識できるほどに仲がよくなった。それを外から見たクラスメイトたちがそう思っただけは不思議はない。

「じゃあ、ちよっとそれっぽいことしてみよー」

「は？」

今この吸血鬼はなんと言った？

「ねえ」

一步、リゼはぼくとの距離をつめた。

こんなことになるなら いや、おいしい状況なんだけど 付き合ってる人について詳しい話をするんじゃないかな。一体どういうことなのかということだけを説明していれば良かった。

「タクってば」

「いやいや……………あれ？」

別に苦し紛れにこんな声を上げたわけじゃない。

「どうしたの？」

「いや、さっき京香ちゃんが歩いていったんだけど、すごく体調が悪そうだったから」

歩いていた京香ちゃんは、あまり顔色が良くなく、うつむいて手で自分の体を抱くようにして歩いていた。正面から歩いてきていたぼくたちにも気づいていない様子だった。

「キョウカ、何かあったのかな？」

「どうだろう？ ちょっと様子見に行こうか」

「そだね」

さっきまでの軽い冗談だったのか、それとも別にどうでも良かったのか、リゼはごく自然にぼくの話題にのった。

京香ちゃんの部屋のドアをノックする。

「はい」

いつものような元気のいい返事ではなく、どこか気だるさがにじんだ返事だった。

「入っていい？」

「どうぞ」

女の子の部屋なので一応許可をとる。

短い廊下を抜けると、京香ちゃんは今敷いただろう布団の上に座っていた。

「どうしたの？ ふたりして」

口調こそいつもどおりだったけれど、どうも体調のほうは良くなさそうだった。気だるげな表情と、それをさらに際立たせる動き。

「京香ちゃんの様子が変だから様子を見にね」

京香ちゃんはそれでもわからないのか、何がなんだかわからないという風にぼくたちを見上げた。

「キョウカ、体調が悪いんじゃないの？ 顔色もあんまり良くないし」

リゼが心配そうにしゃがんで聞く。

「そんなことないよ。今日体育があったからちょっと疲れただけと思っ」

「体育って……何をしたんだ？」

中学の体育ってそんなに過酷だったっけ。少なくとも、学校から帰ってきて寝込まなくてはならないほど激しかった記憶はない。それとも時代は変わって、それほどのカリキュラムが構成されていたりするのだろうか。

「えっと……持久走」

なぜか言いにくそうに京香ちゃんは言った。

「持久走？ この時期に？」

「そ、そう。だからね、ホントにちょっと疲れただけだから、大丈夫だよ？」

ぼくらに心配をかけまいと、京香ちゃんが無理をしていることはぼくにもリゼにもわかってしている。けれど、彼女が大丈夫だと言っているのだから、ぼくたちにはこれ以上できることはない。せいぜい、京香ちゃんに呼ばれたときにすぐに駆けつけることくらいだ。

「そっか。ごめんね、いきなり押しかけて。お大事に」

「そんなことないよ、ありがとう」

京香ちゃんの部屋を出る。

リゼが「うーん」と難しそうな声を出しながら首をかしげた。

「どうした？」

「気のせいなのかな？ キョウカからキョウカ以外の魔力を感じたんだよね」

「京香ちゃん以外の魔力？」

「うん。それほど強くもなかったからもしかしたら気のせいかもしれないんだけど」

京香ちゃんからそれ以外の魔力を感じた、と聞いてまず思い浮かぶのが、ぼくの シグナルグリーン 虚構殺し エンチャント ように魔力付与されたものを持っているか、陽平の竜殺しのように内面に虚構を宿している場合。

「気のせいであるのが一番なんだけどね」

最後に呟くように言ったのが、妙に耳に残った。

翌日、通学路で塀の上を軽快に歩いている人物を見かけた。

「あれ？」

その人物は銀色の髪を揺らしながら、それこそ風とたわむれているかのように塀の上を歩いている。

「あの子……」

リゼが走り出そうとしたとき、リンクスは小さくこちらを向いた。

リンクスは小さな笑みを浮かべて塀の上を走っていった。

風が吹き抜けるように、颯爽と姿を消した。

「見かけたらよろしくって言ってたのに」

残念そうにリゼが言う。

「恥ずかしがり屋なんじゃないか？」

まあ、ぼくが話したときにはそんな印象は全く受けなかったけれど。

「そうかな？」

リンクスが消えたほうに視線を向ける。

当然だけれど、リンクスの姿はなかった。

「おっすー、拓にリゼちゃん」

後ろから元気な声が聞えてきた。

「おう、夏樹、珍しいなこんなところで会うなんて」

「おはよう」

「おはよう、リゼちゃん。まあ通学路だしな。会っても別に不思議じゃないだろ？」

それもそうだ。バス停だってこの近くにあったはずだ。

今まで会わなかったほうが不思議なのかもしれない。

「ま、たまには一緒に行こうぜ？ いいじゃん、両手に花みたいな状況じゃん？」

「主にリゼがな」

「ちよつとわたしそれ嫌だな」

本当に嫌そうな顔だった。

「ふられたー」

大げさなリアクションを取る夏樹はいつもどおりだった。一通りのリアクションを取り終えた後、夏樹は何事も無かったかのように会話を進行させた。

「それよりよー、さつき銀髪の子とすれ違ったぜ？ つつてもその

子は塀の上歩いてたけど」

「リンクスだろ、そいつ」

「リンクス？ ああ……ああ！」

忘れていた、と夏樹はやっぱり大げさに手を打った。

「お前の記憶力はフロツピ―以下だな」

あんなに衝撃的な出会いをしたのに。

「いやまあ、なんか笑ってたからよ、別人に見えたんだって」

「笑ってた？ あの面の皮が鉄でできたようなリンクスが？」

もっとも、それほど深い付き合いではないから、断言はできないのだけど。というか、あの程度の関係で、ここまで言うべく自身の気が知れない。リンクスだって、ふつうに笑うことくらいあるだろう。

「ああ、そりゃもう喜色満面を絵に描いたような笑顔だったぜ？」

「へ、へえ」

満面の笑みを浮かべるリンクス。ぜひ一度、見てみたいものだ。

教室に入って細江さんに声をかけると、あまり元気の無い声が返ってきた。

「どうしたの？ ヤエ、最近元気ないよね」

細江さんはねっとり、という擬音が似合いそうな視線をリゼに向けた。

「なんでもないよ」

ささやくような小さな声で発せられたその言葉が、ぼくはどうしても耳から離れなかった。

中庭で夏樹と灰谷に今朝のことを相談してみた。

夏樹は困ったように頭をかき、灰谷は呆れたようにため息をついた。

「コトネ、何か知らない？」

灰谷はもったいぶって水を飲む。ボトルを置くと、またため息をついた。

「人が変わるときは何かしらの影響を受けたときか、周囲の状況が変化したときだ」

「？……うん」
「つまりそういうことだ」

これ以上言うことは無いとばかりに、灰谷は食事を再開した。
「俺も昨日言ったけどさ、やっぱり細江の問題だぜ。別に誰も悪くないんだぜ？」

フオーするように言う夏樹。

「なあ、一つだけ聞きたいんだが、夏樹と灰谷は細江さんの様子が変わな理由を知ってるみたいだけど、それは細江さんから聞いたのか？ それとも見てたらわかったのか？」

ぼくの質問が意外だったのか、二人ともまじまじとぼくを見つめた。

「見てたらわかる」

「見てたらわかったぜ、まあ、当事者はわかりにくいんだろうけどな。案外、細江自身もどうして自分が元気が出ないのか、わかってないのかもな」

やれやれと、夏樹は肩をすくめた。

「どうしてもってなら、もう一度細江に聞いてみたらどうだ？ もしかしたら話してくれるかもしれないぜ？」

「ああ、一応そのつもりだったんだけど、ちょっと相談したくてな」

「細江もお前やりゼみたいに相談すりゃあいいのにな」
ホント、そのとおり。

うまくいかないよな、どうも。

灰谷はあまりこの話題に興味がないのか、食事に集中している様子だ。自分の目的以上のことをしない夏樹、案外似たものようだ。
「それはそうと、知ってるか？ 最近中坊の間で お呪い が流行ってるらしいぞ」

「お呪い、ね。どうして足立がそんなことを知ってるんだ？」

「弟から聞いたんだよ。別にいいだろ、そんなこと」

本当に嫌そうに夏樹が言う。

「で、どんなお呪い？」

吸血鬼といえど女の子ということか、リゼが興味深々だった。しかし、夏樹は今度は残念そうに真面目な顔になった。

「それがな、そんなに嬉々として聞ける話じゃないんだわ」

「どういうこと？」

灰谷も興味をそそられたのか、ただ食べ終えただけなのか、弁当とボトルを片付けて夏樹の言葉を待った。

「俺の弟が通ってる中学だけなのか、他の学校でもなのかは知らないけど、とにかく今流行ってるお呪いってのが、どうも 呪い みたいなんだわ」

呪い。^{カース}

幼い頃や、人の好き嫌いができて、その付き合い方がわからない頃に、その嫌いな対象を呪う。ぼくだってそんな時期もあった。もちろん、呪うといっても思うだけだったけど。

それでも十分だったのだろうか。

「『アカガミさま』だったかな？ そんな名前らしいんだ」

別にそれは天然痘を除けるお呪いという由来でも、戦時中の召集令状が由来でもないのだろう。

「正直『こつくりさん』の方がマシだぜ。こっちは占いだから、元々比較するもんでもないけどよ。でも『アカガミさま』は本気でエゲツナイ。呪いの内容は何でもいいんだ。必要なものは対象の所有物。紙と鉛筆。それから呪いをかける人物三人以上。これだけだ。方法は簡単に説明すると、『こつくりさん』で使用するような紙を作り、文字が書かれた真ん中を空白にしておく。その空白の中に対象の所有物を置く。呪いの内容を四回、全員で読み上げる。所有物を持ち主に返す。使用した紙を呪いをかけた人数分切って、それぞれが持つておく。失敗か成功かを確認したら燃やす。これが『アカガミさま』の一連の流れだ」

ま、真似しないように何箇所も省いたけど。夏樹は言う。

「まあ今のところ成功例はないらしい。当たり前前って言えば当たり前なんだけどな」

もし成功例があるなら、今頃もつと問題になっているころだろう。夏樹の話では、この『アカガミさま』というお呪い　呪いはまだ教職員の耳に届いていないのか、問題として取り上げられていないらしい。夏樹の弟は、この『アカガミさま』を夏樹が知っているかどうかを聞きたかつたらしい。もつとも、話を聞いた後に夏樹が弟に釘を刺したことは言うまでも無い。

「一応聞いておこうか、その『アカガミさま』とか言う呪いはどうなつたら効力が発揮されるんだ？　今の説明だと、そこら辺がハッキリしない」

「鋭いな、灰谷。この呪い、効力を発揮するのはお呪いをしたときに使用した物に、その本来の所有者、つまり呪いの対象が触れたときから効力を発揮するらしい」

「なんだ、案外使いにくいんだな。もつと勝手がいいなら足立を殺そうと思つたのに」

「多分冗談なのだろうけれど、灰谷は残念そうにため息をつく。

「俺を殺せるのは愛だけだぜ？」
知らん。

「ま、そんな感じで『アカガミさま』の存在を知っている人が呪いの対象になつたとき、大体の場合効果の発揮と同時にソレに気づく。成功したら、だけどな。だから、本来の効果発揮時期を知らない相手が条件、もしくは本気で殺しにかかる相手でないと駄目だ」

「そうでない、呪いであることがバレる。」

「ふん。どうせ気づいても解呪はより高度な技術がいる。気づいても解けないだろうがな」

「吐き捨てるように灰谷が言う。どうもご立腹のようだ。」

そしてそれはほくも同じだった。中学生の間で流行っている呪い。それが本当に効力を発揮しているかどうかなんて、そんなの関係ない。

「早くなくなることを祈るよ」

「だな。弟には絶対に関わるなつてきつく言つてあるけどな」

絶対に関わるな、か。

「それにしても、そのアカガミさまっていう呪いはどこが出所なんだろうね？」

「噂の出所を探ることほど不可能に近いことはなかなかないぞ、リゼ」

「でもさあ、別にその中学だけ流行してるんなら何かきっかけがあってもいいと思わない？」

「あー、確かにリゼちゃんの言うとおりだよな……」

「珍しく夏樹が難しそうな顔で唸る。」

「どうせ雑誌かネットかだろう。中学生の知識の仕入れ先はそこら
がメインじゃないか？」

「雑誌かネット。考えられる可能性として最も現実的なのがその二つだ。」

「アカガミさま。」

「些細な中学生の遊びの範囲、なのだろうか。」

「ま、俺らが何を考えてもあんまり意味はないだろうぜ？ こっくらさんが流行った時みたいに、そのうち沈静化するって」

誰と話すわけでもなく、それでいて帰る素振りも見せず空を見上げる細江さんに声をかけた。

「なに？」

こちらに向き直った細江さんの表情は、今まで見たことが無いほどに冷たい表情だった。

「最近様子が変だから」

「昨日も言ってたね。うん、大丈夫。気のせいだよ」

少しだけ表情が和らいだけれど、それでも何かがおかしいと感じてしまう。絶対にこれは気のせいなんかではない。

「本当に？」

「ホントだよ」

「嘘、だろ」

証拠だとか、そんなものがあって言ったわけじゃない。嘘をついているときの細江さんの癖だとか、ぼくはそんなものは知らない。けれど、嘘をついているという確信だけはあった。

「放っておいてよ」

立ち上がり、細江さんは教室から走って出て行ってしまった。

少し呆けていたぼくは、慌てて細江さんを追いかけた。

「何で逃げるんだよ！」

階段の踊り場で細江さんに追いついて、両肩をつかんで聞いた。

細江さんは自分の肩をつかむぼくの手を一瞥した後、ささやくような声で言った。

「最初からこうなるって気がしてた。リゼちゃんがこの学校に来るようになった時から、そうなるんだろなって思ってた。それがとても気になって……でも、林間学校のとくに平野くんに聞いたらすうでもなさそうだったから安心してたんだ。でも、やっぱりこうなるんだよね」

なんの話なのか、ぼくにはわからなかった。どうしてここでリゼの名前が出てくるのか、どうしてぼくとリゼの名前が出てくるのがわからなかった。

「ねえ、平野くん」

細江さんは諦めたような、達観したような目をぼくに向けた。

「今から言うこと、ちゃんと聞いてくれるかな？」

何かを決意したような目。

さきほどの諦めの色がにじんだ目とは違う、力が溢れている目。

「もちろん。ぼくはそのためにここにいる」

事情を聞きだしたのはぼくだ。だから、ぼくがここで細江さんの言葉を、願いを、拒否する権利など、本来的に無い。

いや、拒否する必要がない。

「わたし……平野くんが、大好きです」

まるで頭から氷水をかぶったような衝撃だった。

ぼくの言葉を待つ細江さん。

そんな彼女を前にしても、頭に浮かぶのはリゼだった。

「……ごめん。ぼくはやっぱリゼが好きだ」

だから、本当の気持ちを包み隠さず言葉にする。それが、たとえば細江さんに対する配慮に欠けた行動だったとしても、これがぼくへの誠意だ。

「知ってる」

けれど、細江さんは本当にぼくの答えが予測できていたかのよう
に、そう微笑んだのだった。今にも泣き出しそうな笑みだった。

「だけど……だから、これからも友達でいてくれないか」

嫌なこと言ってるな、と自分でも思う。でも、細江さんが大切な
友達であることには変わりない。

「うん。でも、もうしばらく待ってもらえるかな？」

気持ちの整理、しなくちゃいけないから。

細江さんはそう言って、ぼくに背を向けた。

「ああ。待ってる」

「うん。ありがと」

階段を下りていく細江さんを、ぼくは馬鹿みたいに、その場で立ってただ見つめていた。

本当に、馬鹿みたいに。

どうしようもないほど、嫌な気分だ。

リゼには先に帰ってもらっていたため、帰りは必然的に一人となる。久々の一人での下校は、なんとなく寂しかった。最近はず誰かと一緒に帰っていたから。

「やあ、虚構を殺す者」

突然後ろから声をかけられた。振り向くと、そこにはリンクスが立っていた。

「その呼び方はやめてくれ。それにぼくはそんな奴じゃない」

言うてから、アイーナに使役されていた使い魔を殺したことを思い出し、また気分が悪くなる。

「ぼくはお前の名前を知らない」

「平野拓だ」

「そうか。しかし、名前で呼ぶのは慣れていない。……そんなことはどうでもいい。少し話しておきたいことがある」

「なんだよ」

リンクスは、ぴょん、と飛び上がると、ガードレールの上に降り立った。そして当然のようにその上を歩き出す。

ぼくも特にそれに対して何も言わず、歩みを再開する。

「ぼくは 旋風に生きる者。いろいろと敏感に察することができ、ヒラノ、今、とても嫌なおいがする。こんな汚濁に満ちた風のおいしさは久しぶりだ」

リンクスは本当に嫌そうに顔をしかめた。

「ぼくは運がないのかもしれない。来て早々、死にゆく虚構のにおいを感じ、その次は汚濁にまみれた風のおい。ああ、嫌になる」

「その汚濁ってなんなんだよ。リンクス、君の言葉はいつも謎かけみたいだぞ」

まるでぼくにその意味を伝える気がないような。

ぼくを試しているような。

「ぼくは 旋風に生きる者。行雲流水あるがまま、ぼくはこの流れに身を任せる。それに、虚構を殺す者。どうせもつすぐ、お前に助言を与える者がアトハイサーやって来る。霞を食む者がやって来る」

それが誰のことか、ぼくにはすぐにわかった。

けれど、それこそ、彼の言葉こそ、謎かけなのだ。それがとても役に立つ助言であったとしても、謎を解くまでの時間が勿体無い。

「ならば、このまま安穩と暮らし、事態が起きてから行動するとい。それでもまあ、遅くないだろう？ ぼくは 旋風に生きる者。これ以上は語れない」

用は済んだとばかりに、リンクスはぼくに背を向けて歩き出した。

「待ってくれ」

リンクスは立ち止まり、顔だけをこちらに向ける。

「リンクス、君はどうしてそんなにいろんな情報を持ってるんだ」

自由の身で、いつでもどこでも適当にぶらぶらしているから、というような理由ではないだろう。

「愚問だな、ヒラノ。ぼくは 旋風に生きる者。あらゆる有象無象、あらゆる事象を、ぼくは風により知る。風により感知する」

今度こそ、本当にリンクスは歩き出した。もつとも、歩いていたのはガードレールの上で、どこまで歩いても目立つことこの上ないのだけだ。

リンクス。

最後がきまらない奴だ。

いや、逆にきまっているのか。

「帰ろう」

リンクスと話していたらなんだか疲れてしまった。煙に巻かれたようにしか感じられないし、狐につままれたような気分だ。

アパートに帰ると、まるでぼくを待ち構えていたかのようには立っていた。

「おかえり、拓」

「ただいま、千堂さん」

千堂さんは嘆息して肩をすくめた。

「どうしてそんなに敵意をぼくに向けるんだい？　ちょっと拓の帰りを待つてただけじゃないか」

「どうしてぼくが帰ってくる時間が？」

「うーん、長年の勘」

人外の彼。

悠久の時を生きる仙人である彼が、そんな言葉を使うと、それがどんな場合であつても信じてしまう。

信じてしまいそうになる。

「嘘でしょう？」

「うーん、まあ、そうなんだけどね。仙人だけど、別に未来予知ができるわけじゃないからね」

悪びれもせずに千堂さんは笑う。

さきほどのリンクスの言葉は、どうやらハツタリのようにだった。ぼくと別れた後で千堂さんと接触しているらしい。

「本当はあの　旋風に生きる者　が教えてくれたんだけどね

なるほど、確かに拓は何らかの助言が欲しいみたいだけど、ぼくからはあまり聞きたくないんじゃない？」

どうなのだろう。

役に立つことは確実だ。ただ、千堂さんの謎かけを解くことができるのだろうか。

「ま、一応助言しておくよ。今回はちょっと急がないと大変だから、謎かけの難易度は下げておくよ」

下げるくらいなら謎かけにしないでほしい。

「大丈夫。謎かけというレベルでもないから」

「で、その助言というのは？」

「うん。人から聞いた噂話とか、まあ与太話だとか、そういうものが自分の身の回りで起きないとは限らない。人から聞いた話が本当だとは限らない。大勢の若者の存在を感じるよ。若者……まだ幼さも残っている感があるけど、本人たちはそう言われるのはあまり好まないだろうね」

まるで実際に見てきたかのように、千堂さんは詰まることなく流れるようにそう言った。

「以上だよ。まあ、考えればすぐにわかるようなことだから。それにもう、拓は今の言葉の意味がわかる状態にはなってる」

それでも ぼくは千堂さんの言葉の意味が、あまりわからなかった。

「もしこれでわからないなら、最近拓の周りで起きた出来事を思い出してみるといいよ。すぐに解答こたえが出てくるはずさ」

千堂さんはそう言い残して、アパートの階段を上がって部屋に入ってしまった。

ぼくの身の回りで、それも最近起きたこと。

さすがにリゼとの出会いや、灰谷と陽平の一件、魔術師の襲来まで記憶をさかのぼる必要は無いだろう。思い出さなければならぬこと どれだ。

旋風に生きる者 リンクスの来訪。

細江さんとの微妙な距離、それから告白。

京香ちゃんが体育で疲れて帰ってきた リゼが魔力を感じた。

夏樹の弟が通う中学校では呪いが流行している。

リンクスの意味深な言葉。

千堂さんの助言。

頭の中を駆け巡る情報。

馬鹿馬鹿しいほどに、単純明快な解答こたえ。

気づかなかったことが　　すぐに関連を連想しなかつたことが、それがすでに不自然なほどに単純。

京香ちゃんあの不調と、リゼが感じた魔力。

呪い。

この三つの関係性を疑う必要がある。

中学生が行う呪いが成功する確率なんて、そんなものはほとんどないだろう。しかし、この世界はそんな低い可能性ですら十分だ。

世界学。

たとえばくたちが世界学の本質の一端を知ったところで、その矛盾と違いを知ったところで、世界学とは本来、人の意識に深く結びついている。別に、吸血鬼やドラゴンのような夢ロマンの為だけの考えではない。

呪い。

呪いのような概念的な、オカルト的な存在も顕現する。

世界のシステム。

結局のところ、ぼくは何も理解していない。

世界学を語るにはまだまだ早すぎる。

別に世界学が間違った学問である、というわけではない。黒木さんの説明がデマカセなわけでもない。

並行世界も存在するし、どこかの学者が提唱した説もまた事実なのだ。そうでなければ説明できないことだって、たくさん起きている。

そうだ。

双方が正しい。だから、それゆえに、何が起きてもおかしくない。

「京香ちゃん……嘘はいけないよ」

ぼくたちに心配をかけなくなかったからなのかは知らないけれど、この程度のこと、ぼくは　　ぼくたちは迷惑なんかじゃない。

京香ちゃんの部屋のドアをノックする。けれど、時間的にはまだ帰っていないだろう。高校生のぼくよりも、中学生の京香ちゃんの

ほうが帰りが遅いのは別に珍しいことじゃない。というよりも、それが日常的だ。

と、京香ちゃんがここにいないことを願いながらドアノブをまわす。

がちやり、とドアが開く。

「京香ちゃん？」

宗次がこの時間に部屋にいるよりは、京香ちゃんがいるほうが現実的だ。と、そう考えて、それでも鍵の閉め忘れであってほしいと思いつつ、声をかける。

「……拓、さん？」

部屋の奥から、気だるげな京香ちゃんの声が聞えた。

「上がってもいいかな？」

口では聞きつつも、ぼくはすでに部屋に上がりこんでいた。

「どうしたの？」

返事を待たずに上がってきたぼくを見上げ、京香ちゃんは不思議そうに首をかしげた。けれど、それはぼくの台詞だ。

「それはこっちの台詞だよ、京香ちゃん。京香ちゃんが体調が悪いの、体育の所為ってわけじゃないんだろ？」

呪いだろ？ とはさすがに言わない。

「え？ そんなこと……」

言いにくそうに、言葉の最後のほうは小さくて聞き取れず、うつむきながら言った。

「だったら、どうしてまだ体調が悪いのさ」

京香ちゃんは苦しそうに顔をしかめる。

「心配かけたくなかったから」

「黙ってたほうが心配だよ」

「そうだね、ごめん。拓さん」

京香ちゃんは小さく笑ったかと思うと、そのままベッドに仰向けに倒れた。

「……………」

京香ちゃんの言葉の続きがあるかもしれない、と黙って待っていたが、どうもその様子もなく、京香ちゃんは胸に手を乗せてそのままの体勢でいた。

胸に乗せた手に力がこめられる。

「京香ちゃん？」

よく見れば、京香ちゃん表情は苦しげに歪められ、額にはかすかに汗もにじんでいた。

「京香ちゃん！ おい！」

京香ちゃんは返事をせず、苦しそうに息を吐き出すだけだった。だんだんと、それは酷くなっていく。

「くそっ！ 待ってて！ すぐに黒木さん呼んでくるから！」

ぼくには彼女くらいしか、こんな事態に対応できる人を知らなかった。

4 (後書き)

人鳥の諸事情により、次回更新日は未定です。できうる限り早く更新します。

5 (前書き)

今日は大幅更新です。

「こりゃ酷い。誰だい？ どうしてもつと早く言わなかった？ まあ、平野少年が悪いわけじゃないんだが……さて」

なんだか久しぶりに、黒木さんがこんなに一気に話した気がする。前はショットガンのように話していたのに。

今もだけど、最近シリアスな事件が続いていたからだろうか。

「それにしても……あたしがついていながら、こんなことになるとはね。少年、ちょっとおつかいだ」

「なんですか？」

「あたしの部屋の、テレビを置いてる引き出しの真ん中の段の最奥に、木の箱がある。それを取ってきてほしい」

「わかりました」

相変わらず、京香ちゃん表情は苦しげだ。

後ろ髪引かれる思いで部屋のドアを開ける。

「いや、やっぱりあたしが行く！ 京香ちゃんを頼む」

黒木さんが慌てた様子でぼくの肩をつかみ、有無を言わさぬ勢いで部屋から出て行った。部屋が散らかっているのかもしれない。

「本当、普段は子どもっぽい人だな」

博識の魔法使いとは到底思えない。

また京香ちゃんの傍らに座る。

汗がにじんだ手を握る。柔らかな手。けれど、その手は『アカガミさま』の影響なのか、インフルエンザにでもかかったかのように熱い。

勢いよくドアが開き、黒木さんが駆け込んできた。その手には確かに木の箱があった。

「さて、ちよいちよいと解呪をしてあげよう」

黒木さんは箱から一枚のお札を取り出すと、ぺちぺちと京香ちゃんの額を叩き始めた。

「……黒木さん？」

ぼくには、この行為が『アカガミさま』の呪いを解く行為には、全く見えない。むしろ、苦しむ少女を、紙切れでぺちぺち叩いて楽しんでる、性悪女に見えてしまう。

「よしよし、顔色がよくなったね。あとはしばらく安静だよ。って、今言っても聞えないか。それにしても、穏やかな寝顔はかわいいねえ。少年、これはちよっとくらい手を出してもいいんじゃないか？」

確かに顔色もさつきよりは良くなっているし、寝顔も幾分穏やかになっている。よもや、あんな適当極まりない行為で、ここまでの効果が出るとは思わなかったけれど。

「だけど、それとこれとは別ですよ。ていうか、そんな思い出したように饒舌キャラに戻らないでください」

「うるさいよ。ったく。そういうツツコミは、この部屋を出てからにしてくれないかな？」

やだやだ、と、手をひらひらさせながら歩く黒木さんに続いて部屋を出る。

「で、だ。少年、とりあえず、佐倉少年を呼んでくれないか？」

「え？ どうして陽平を」

「はあ……ほんと、こういう時の少年は全く使えないね。だめだよ、ほんと。佐倉少年と京香ちゃんは、同じ中学の同じクラスじゃないか。忘れたとは言わせないよ？ ほら、この事実だけで、ちよっと話を聞く価値はあると思えるだろう？ それに、少し頼みたい仕事もあるしね」

本当に思い出したように饒舌キャラに戻ったな、黒木さん。

「その仕事って、ぼくにはできないんですか？」

ぼくにできることなら、別に陽平に頼む必要は無い。それにぼくにできることならしてあげたい。

「物理的には可能だね。でも、色々なしがらみによって、それは困難だ」

回りくどい。今日の黒木さんは機嫌が良いようだ。もしくは極限

に悪いか。

「いいから、早く呼んでちょうだいよ、少年」

「わかりましたよ」

陽平はすぐに電話に出た。

「なんだよ」

「ご挨拶だな。ちょっとアパートまで来て欲しいんだけど」

「あん？　なんでまた。虚構絡みで何かあったのかよ」

「勘がいいな、その通りだ。詳しいことはこっちで説明する。黒木さんもいるから、急いで来い」

「おい、ちよ……」

何か言いかける陽平の続きを聞かず、ぼくは電話を切った。

「どうしてあたしがいると、急いで来なくちゃいけないのかな？」

「美人のお姉さんを待たせるのは、礼儀に適ってませんからね」

「よく言うよ」

黒木さんは小さく笑った。そして急に表情を厳しいものに変えると、やはり真剣な口調で言った。

「あれ、『アカガミさま』とか言ってたっけ？」

「はい。さつき簡単に説明しましたが、どうも近隣の中学で流行ってるみたいです」

京香ちゃんの通う中学も　例外ではなく。

京香ちゃん、その被害者となった。

「『アカガミさま』ね。赤紙さま？　赤神さまなのかな？」

「いや、口頭で言われても区別つきませんよ」

「いや、まあ、そんなに深く考える必要はないよ。ただね、どうして『アカガミさま』と呼ばれるようになったのか、と思ってね。不思議じゃないかい？」

別にぼくは、そんなことを思ったことは無いけれど。

「そうですね？　こっくりさんとエンゼルさんみたいなものですよ？」

黒木さんは大げさにため息をついて、これだから素人は、とでも

言いたげな顔で肩をすくめた。

「やれやれ……これだから素人は、とでも言いたげな顔に見えた？
ふふん、あたしはそんなことは言わないよ。ただね、こっくりさんとかエンゼルさんとは全然別物ってこと。それにね、名前を変えただけでこっくりさんと同じ……って、そういうこと言いたかったわけ？」

言いながら気づいたのか、黒木さんは意外そうな顔でぼくを見た。
「いや、まあ、そうですね」

「ふうん。ま、そういうことだとは思っけどね。こっくりさんと違うのは、この『アカガミさま』が占いじゃないってこと。こっくりさんみたいに占って、『何か』を降ろして、自分が悪い目に遭うなら自業自得だけど、人を呪うなんて最低でしかないね。下劣だ」
吐き捨てるように言った。黒木さんの部屋に入り、ひとまず一息つく。

「今更ですけど、京香ちゃんのをそばに誰かいないくて平気ですかね？」
目が覚めた時、誰かがいたほうがいい気がするのだけど。

「少年は京香ちゃんに対すると、優しいな。なんだ？ 気があるのか？」

にやにやと、黒木さんは楽しげに頬を上げる。

「そういうわけじゃないですよ。単に誰かいたほうがいいかな、と思っただけです」

残念そうにため息をついた。表情豊かなお姉さんと話するのは楽しいけれど、どうやら黒木さん相手だと疲れるらしい。というか、よくわからない。

「京香ちゃんが泣くぞ？」

「？ どうしてですか？」

今度こそ本当に呆れられたようだ。

よくわからない。

「心配しなくても、リゼちゃんに頼んでる」

「……そうですね」

相変わらず、いつの間にか手を回している人だ。

お茶を飲みながら話をしてしていると、ドアをノックする音が聞えた。

「おーい、きたぞー」

「よし、入れ少年」

ドアが開く音がして、少し間を置いて陽平が部屋に入ってきた。

「っておいおいおい！ どうして俺が部活も早退して必死こいて来たつてのに、あんたたちは悠々と茶なんか飲んでんだよ！」

ダン！ と、机を両手で叩いた陽平の額には、確かに玉の汗が浮かんでいた。

「そういきり立つなよ。ほら、少年の分の茶だ。これでも飲んで落ち着け」

「お、おう」

陽平は黒木さんから湯飲みを受け取り、ぐつと一口飲んだ。

「あつちーよ！」

淹れたただから、熱くてもおかしくは無いだろう。けっして、良いいお茶を飲んでいるわけではないのだ。

「それより、どうして俺が呼ばれたんだ？」

依然として陽平は、舌をやく熱さと戦っているようだったけれど、むしろそれから気を紛らわせるように本題に移った。

「『アカガミさま』について吐いてもらおう」

「いや、どうして尋問調なんですか。まあ、そういうことだから陽平、知ってる限り教えてくれよ」

そう言つと、陽平はなぜか不思議そうな顔をした。

「どうしてあんたたちがソレを知ってるんだ？ あれは中学生で流行って遊びだろ？」

「遊びつておま」

声を荒げたぼくを、黒木さんが手で制した。

「平野少年、こういう認識をするのも仕方ないことだろう？ 実害があったことを知らないのだから」

そう言われれば、ぼくはうなずくしかない。

「実害、あつたのか？」

「ああ。中坊の下種な遊びのおかげで、熱を出して大変だったぞ。それに、まだ呪い自体解呪が完了したわけじゃないから、安心できないけど」

え？

「ちよつと、さっき解呪はできたみたいな口ぶり態度でしたよ！」「ちよいちよいと解呪してあげよう、とか、後は安静にしていれば、とか。」

けれど、黒木さんはふるふると首を振り、

「アレは少年を安心させるための嘘だよ。大体、解呪があんなに簡単なわけじゃないか」

確かにそうだけど！ あんなお札でぺちぺち叩いたくらいで解呪ができたら苦労はしないけど！

あー、呪い云々よりも、黒木さんに腹が立つてきた。

「ともかく、あの呪いには強い感情を感じたよ。おぞましいほどにね。佐倉少年、君、本当に中学生かい？ 中坊があんな負の感情を持つてるなんて、信じたくないよ。それに、京香ちゃんがそんな風に思われているとも、ね」

強い負の感情。ぼくはそれに対し、何か引っかけりを感じた。何か忘れているような気がする。少し前にそんな話をしたんだ。

人影兄弟の退院祝いをした日の夜に。

「黒木さん」

「なんだ？ 少年」

「京香ちゃんなんですけど、クラスメイトたちとは、あまりうまくいってなかったみたいです。退院してきた日の夜、そんな風なこと言っていました。ほのめかす程度だったので、あまり深く聞けなかったんですけど」

入院中に誰も見舞いに来てくれなかった、とか、心配してくれる人はいない、とか、そんなことを言っていた気がする。記憶はあい

まいだし、ぼくだつてお見舞いに行った記憶が無い。我ながら人道的じゃないな。お見舞いぐらい行ってやれよ。

黒木さんは神妙にうなずくと、陽平に向きかえった。

「今の話、本当か？」

「え？ 被害受けたのは人影なのか？」

陽平が声を上げる。

「そつだ。あとで話そう。とりあえず、今の平野少年の話は本当か？」

「ああ、俺が見た感じはそつだな。いや、感じた、と言つたほうがいいかもな」

「どういふことだ？」

「俺自身、どうしてクラスのやつらが、人影のことを嫌つてるのかわからないんだ」

人を好きになることに理由は要らないように、嫌いになることにも理由は要らない。誰かがそんなことを言つていた気がする。それか何かの本に書いていた。どっちにしても、負の感情を抱くなら理由くらい持つてほしい。

「俺はクラスのやつらが人影を避けてるから避ける、なんてことはしねえから、ふつうに人影に話しかけるんだけどよ、その時の空気がウゼエのなんのつて」

退院祝いをしている時、京香ちゃんが遠慮なく陽平にツッコミとつか、注意を飛ばしていたことを思い出す。仲は良いらしい。

「うざいつてどういふ風に？」

「若者は言葉を知らんね、やつぱり。うざいで済まさないほうがいいよ？ もつと本を読むべきだと思つ」

「うるせえよ！ とにかく！ 俺が人影と話をしてると、人影に対する視線つての？ 雰囲気？ が俺にも伝わってくるわけよ」

「まあ、それはわからんでもないな。ぼくもそつという経験はある」

ただ、その感覚がどこまで陽平の言つた感覚に近いかはわからないし、それ自体が勘違いだとも言つことはできる。

「だろ？　なんかこう、帰れーとか、どうしているのー、とか、そういう……なんだろな？　そういう雰囲気があるわけよ」

陽平自身、それがどういったものなのかを説明するのに、言葉が見つからないらしい。これは語彙の問題というよりは、言葉にしづらだけなのだろう。雰囲気は微妙なものだから。

「なら少年、これならどうだ？」

黒木さんは少し間を置いて、激しい嫌悪をにじませながら、

「『消えろ』」

自分でそういうことすら嫌だというように、言った。

部屋の空気が変わった気がした。

「黒木、さん？」

「お札で京香ちゃんを叩いてる時に思念を感じたのさ。それこそ、あたしが逃げなくなるほどにね。消えろ、消えろ消えろ消えろ消えろ！　そりゃ人間、誰でもそう思うことあるさ。でしょ？　平野少年も佐倉少年も、もちろんあたしも。呪いをかけられた京香ちゃんも。誰でも……でも、行動に移したら駄目だろう」

その声には激しい怒りがにじんでいた。この町を魔都　　というほど大きくないけれど　　に変えたあの魔術師に対してでさえ、これほどの怒りは見せなかった。

黒木さんと同じ部屋にいるだけで、その圧力に押しつぶされそうになる。

「ちよつと、あんた、魔力駄々漏れ……」

苦しげに陽平が言っつて、黒木さんはハツと我に返った。

「あ、ああ、すまん」

ふっ、と圧迫感が薄れ、今度は気まずさがやってきた。黒木さんが頭をかきながら、まるで言い訳するみたいに言葉を繋ぐ。

「まあ、だいたいの事情はわかったよ、うん。佐倉少年、ちよつと頼まれて欲しいのだが、大丈夫か？　なに、難しいことじゃないし、命になんらかの危険があるようなことでも、経済的になにか問題が生じるようなことでもないさ」

曖昧で、こういう事態でもなければ胡散臭いことこの上ない黒木さんの口ぶりにも、陽平は当たり前のようにうなずいてみせた。

「こういう時の陽平は頼りになるよな、ホント。」

「そりゃあ、あんた、同級生の友達^{ダチ}がひでえ目に遭ってるのに、黙ってる奴なんかいねえよ」

「男前だな、陽平」

「おいおい、褒めても竜殺ししかでねえよ」

「竜殺しはでるのかよ！」

「俺は別に、欲しくてこの力を持つてるわけじゃないんだぜ？」

「そういえば、気づけば竜殺しの力を持っていたんだっけ。そう思えば、こいつも世界学の被害者なのかもしれない。」

「で、俺に頼みたいことってなんだ？」

黒木さんはうなずいて、木箱を一つ、机の上に置いた。

「それは？」

木箱の蓋を外すと、中にはお札が入っていた。黒木さんはそれを一枚手にとって、ぼくらの前に出した。

「これはいわゆる『魔封じの札』さ。今回はこれで魔力を抑える結界を張るってわけだよ。場所はもう見当はついてるよね？ そう、学校さ。竜殺しの力を使えば、この町内の中学校を全てまわるのなんて、造作もないだろうしね。目立つと思うか？ 実は目立たない。」

「竜殺しが全力で走れば、常人には目視できないほどの速度になる」

「そんな馬鹿な、と一瞬思っただけでいい。ドラゴンの状態に戻った灰谷と、竜殺しの陽平の戦い。あの時、ぼくは陽平の攻撃が白い線にしか見えなかったはずだ。あの魔術師との戦いの時も、ぼくは気づけば助けられていた気がする。」

「まあ、確かにできるぜ？ でも、俺には結界の知識なんてない」

「無くても大丈夫。敷地を囲むように張ってくればそれでいい」

「でも、それだと風とか雨ではがれちゃいませんか？」

張り方にもよるだろうけれど、それでもあまり張り付いている時間は期待できない。

「ま、形だけのものだし、はがれちゃってもいいんだけど。お札にこめられた魔力が、学校を包んでくれたらいいわけ。そうしたら境界は効力を発揮し、そうだね、今学校で『アカガミさま』をやっている子たちが飽きるくらいの時間は稼げるね」

十分な時間、なのかぼくにはわからない。けれど、『アカガミさま』による被害はそれで無くなるだろう。

「『アカガミさま』を正式な方法でやろうとしたら、学校が一番だからね。学校で抑えるのが一番楽だ。ということで頼めるかい？」
「もちろんだ」

陽平はお札を手に取り、立ち上がった。

「一つの学校には三枚、三角形に貼ったのでいいのか？」

「うーん、確かに『割り切れない』、『分割できない』数だけど、四枚、四角形でお願い」

「了解。ああ、終わったら拓に連絡するぜ？」

陽平の体を漆黒の鎧が包み、竜殺しの姿になる。

「ああ、よろしく」

「この姿になると『竜を殺せ』ってうるせえんだよな
やっぱりまだ、その声は聞えるのか。」

ドラゴン 灰谷琴音。五大竜の一体。

灰谷を殺すのが竜殺しの存在理由。

「じゃ、行ってくるわ」

勢いよくドアを開け、級友思いの竜殺しは走り出した。姿はすぐに見えなくなった。

閉めたはずのドアが、突然、陽平が出て行った時よりもさらに強い勢いで開かれた。

「黒木さん！ あっ、タク！ キョウカが！」

嫌な予想しか、できなかつた。

「拓さん」

疲れた顔。汗で濡れ、顔色はよくない。

「探したよ。どうして突然部屋を出たりしたんだ？ みんな心配したんだよ？」

「ごめん、なさい」

本当に申し訳無さそうに、おなかの辺りで手をもじもじさせながら京香ちゃんは言った。

「無事ならいいんだけど。どこか調子の悪いところ無い？」

無いわけがない。顔色は悪いし、汗は凄いし、何より、まだ『アカガミさま』の呪いは解けていない。けれど、京香ちゃんはふるふると首を横に振ったのだった。

「大丈夫。大丈夫だよ」

それはまるで自分に言い聞かせているようで、聞いていて痛々しい気分になる。

「我慢しないでいいんだよ？」

「……………」

京香ちゃんはずいいたけれど、体の不調を訴えることはしなかった。

「とりあえずアパートに帰ろうか」

「……………」

隣に並んで歩き出す。京香ちゃんの足取りは重かった。

「でも、どうしてこんな場所に？」

突然部屋からいなくなった京香ちゃんを見つけたのは、近くの川原だった。

「ふらついてたら着いただけだよ」

「ふうん？」

それが嘘でも本当でも、本音ではどうでもよかった。見つかった

こと、それだけで十分だ。

京香ちゃんの重い足どりに合わせて歩く。本当に、ゆっくりとしていて、まるでのんびりと散歩をしている気分になってくる。

散歩がしたかっただけなのか？

そう思っつて、その考えを振り払う。何が悲しくて、こんなにも体調が悪いときに散歩なんかしようと思っつんだ。不可解な行動だけど、本人的には全く理由はないみたいだし……。

また小言を言いそうになって、かろうじてその言葉を飲み込む。

いつまでも子ども扱いはしてはいけないだろうし、そのくらい京香ちゃんだつてわかっつているだろう。

「ねえ、拓さん」

「うん？」

「あたしがお兄ちゃんと鏡の向こうの概念个体だつて話、覚えてる？」

「あ、ああ」

どうしたんだろう、いきなり。今までこついう『出自』に関わる会話なんてアパート内で話したことなんてなかつたのに。それこそあの魔術師の時以外に。

「人間じゃない、んだよね。見てくれも、身体能力も全部、人間とほぼ同一なのに、存在として、全くの別物なんだよね。だから、黒木さんもあたしたちのことを『限りなく人間』だと評した。でも、それつてやつぱり『人間じゃない』つてことだよな？」

「それは……」

ぼくはなんと言葉を返せばいいのだろう。何を言つても取り繕うようになつてしまつただろう。そうなれば京香ちゃんを余計に傷つつけることになる。しかし、だからといって何も言わないわけにも……。

「ねえ、拓さん」

京香ちゃんはもう一度ぼくの名前を呼んだ。

「リゼさんと灰谷さんつて同じクラスなんだよね？」

「ああ」

「リゼさんと灰谷さんって苛められてる？」

「いや、苛められてないよ」

悲しそうな、京香ちゃんの顔。

「どうして？　ねえ、聞かせてよ」

まるでそれが信じられないことのように、京香ちゃんはぼくの服を掴んで、涙を目に溜めながら言う。

「どうして！」

「……リゼは」

ぼくは全てをありのままに言うことにした。そうしないと、きっと京香ちゃんは納得しないだろう。

聞いたからといって、受け入れられるかはわからないけれど。

「リゼはクラスに入ったその日から、クラスのみんなに受け入れられたよ。あんな性格だから、みんなも接しやすかった」

きっと、京香ちゃんは自分が人間じゃないからみんなに苛められている、そう思っているのだろう。

何もしなかったら苛めじゃない、そんなわけがない。クラスメイトの発する視線、雰囲気は確かに京香ちゃんを追い詰めている。

「灰谷は実は少し浮いていた。冷静で、言いたいことはハッキリと言うし、何より強気だった。言葉遣いも少しだけ乱暴というか、男っぽかったし。けれど……」

あいつは。

「……灰谷は別に『ドラゴン』だから、人間じゃないから浮いてたんじゃないんだ。自分から浮くように行動してた。それは自分がドラゴンだからだったのかどうかは、知らないけどな。そして、ある出来事が起きた」

「ある出来事？」

「ああ。クラスの一人に、世界学に真っ向から反対する考えの奴がいた。別にそれは悪いことじゃない。けれど、そいつはリゼの存在を否定しようとしていた」

「……っ！」

「そこに灰谷が現われて、そいつと口論になった。ついにはそいつは、灰谷に殴りかかった」

京香ちゃんは悲しげに顔をゆがめた。聞きたくない、そう言っているようだった。でも、話さなくてはいけない。

「でも灰谷はドラゴンだ。一瞬のうちにそいつを床に倒し、口から小さく、ほんの少しだけ炎をもらして言った。『オレはドラゴンだ。オレもリーゼ・ブリュスタンも紛い物じゃない』って。そいつは教室にいにくくなったのか、最近は登校してないけれど、リゼも灰谷も、誰からも虐げられていない。みんなが受け入れている。そいつも、もしかた帰ってきたなら、ぼくたちは受け入れるだろうさ」

それは掛け値ないほどの本音だった。石動が戻ってくるなら、あんなことを言った奴だけど、それだって思想の違いだ。彼を虐げる理由にはならない。

そう思う。

「だから、京香ちゃん、そんなこと言わないでくれよ。ぼくが一度でも、君に人間じゃないことを理由にして、何かをしたかい？」

京香ちゃんは堪えきれなくなって、ボロボロと涙をこぼし始めた。「だったら、どうしてあたしは……あたしは……」

「わからないよ。けど、全員がそうじゃないだろ？」

例えばあの竜殺し。

元人間で、いや、今でも純粹な人間の彼。

「え？」

京香ちゃんは気づかない。

彼がいることに。

自分を対等な存在として見てくれている、その人物に。

「ほら、いるじゃないか。教室で話しかけてくれるんだろ？ 病院には見舞いに来なかったけれど、退院祝いには来てくれたじゃないか」

「あ……。佐倉」

「あいつ、結構心配してんだよ」

陽平のポイントを、少しだけ上げておくことにしよう。もしかしたら、怒られるかもしれないけれど。

「あいつ……」

今流れている涙が、悲しみによるものでなくなったなら、ぼくはそれでいい。

アパートに戻ると、さきに戻っていたリゼに思いつきり叱られ、京香ちゃんはおとなしく布団に戻った。ぼくはというと、あまり見ないリゼの怒った姿に、少なからず恐怖を感じていた。正面からそれを受け止めざるを得なかった京香ちゃんは、さぞ怖かっただろう。ぼくたちはとりあえずリゼの部屋で休憩をすることにした。リゼはともかく、身体能力は一般的な人間程度しかないぼくはヘトヘトだ。黒木さんも京香ちゃんを探しに出ていて、部屋に携帯を忘れてしまったのか、連絡はつかなかった。

「それにしても、無事に見つかってよかったよ」

「なんで川原に行ったの？」

「さあ？　そこまでは聞いてないよ。多分、聞いても言ってくれないだろうし」

聞いたけれど教えてくれなかった、というほうが正確か。どちらにしても、ぼくたちがその理由を知ることはないということだ。

「でも理由はあるはずだよ」

「そうだな。京香ちゃんの場合、ぼくたちに心配をかけるのがわかってるのにあんなことをしようとは思わないだろうし」

体調が悪いことすら、隠そうとしていたくらいだ。そんな彼女が突然出て行くなど、よほどのことがない限りあり得ない。

「でも本人が言ってくれないからな、なんとも言えない」

「過去が過去だから、自分で抱え込むクセがついてるのかもね」

「あー。そうかも」

その過去がどこまで本当かはわからないけれど。彼らの存在がいづから始まったのか、それによってかなりの違いがでてくる。

「それでも、『記憶にある』なら、それは本人にとって真実だよ」
リゼが言う。

「そつだな」

存在が始まった時期なんて、本当はどうでもよかったんだ。

「拓、おなかすかない？」

「なんだよ、突然」

「昼から結構時間経ってるし、まだ明るいけど、そろそろおなかすかないかなって。わたしはあんまりそういうのないから、もしかしたらタクはすいてるかもしれないし」

「ああ、そういえばそつだ。ゴタゴタしてたから気づかなかったよ。そつだよな、京香ちゃん探すのに結構な時間かったしな」

あれ？　なんだこの違和感。気づかなかった？

なぜ？　いくら夏で日の時間が長いとはいえ、さすがに夜になれば暗くなる。そうなれば、時間の経過は嫌でもわかってしまうのに。気づかないはずがないのに。それなのに、ぼくは疲労以外に、時間の流れを感じなかった。当然のようにおなかもすいていない。

そもそも、明るさが変わっていない。

「リゼ、ちょっと待って」

「え？　うん」

携帯を確認する。ディスプレイには、着信を示す表示は出ていない。ということ、陽平はまだ『中学お札めぐり』を続けていることになる。しかし、竜殺しの移動速を考えれば、とっくに終わっているはずだ。

そしてぼくは、最大の異常を発見する。

「……六時？」

「え？」

ぼくの携帯の時計は、六時を指していた。

携帯の時計は電波時計だ。遅れることも、進むこともない。正確な時計だ。それなのに、明らかに過ぎているはずの六時を指し、しかもずっと、時計を見続けていても六時一分にはならない。

「リゼ、ちょっと携帯でもなんでも、この部屋にある時計見せて！」
「え？ あ、うん」

リゼは立ち上がり、衣装ケースのようなものの上に置かれた時計を持ってきた。

「……おかしいよね」

「ああ」

リゼが持ってきた時計は、やっぱり六時を指していた。

窓から差し込む光は、まだ日が空にあることを示していた。

「これで夜だったら、すこしは安心したんだけどな」

「そだね」

これは明らかに異常だ。おかしい。こんなことが起きるはずがない。すくなくとも、ふつうの世界ならば。

「並行世界ってやつなのか？ ここは」

リゼや灰谷がやってきたように、ぼくたちも移動してしまったのだろうか。

「違うと思う。わたしが元いた世界は、この世界とは全然別物だったから。時代も風景も」

空気も、全部。だけど、ここは変わってない」

だから、『並行世界』じゃない。

「じゃあ、ぼくらの世界が異常なのか？」

世界学。

果たして、本当にそうなのだろうか。『時間が進まない世界』が現実に顕現するほどまでに、その概念は人々に浸透しているのだろうか。物語中の設定では見かけることはあっても、そこまで知られたことではないと思う。

「そうでもないんじゃないかな？」

意外にも、リゼがそうぼくの考えを否定した。

「タクは思ったことない？ 例えば、一日が二十五時間あったなら。それとか、幸せを感じたとき、このまま時間が進まなければいいのに、とか」

思ったことは 確かにある。だったら、それがこのタイミングで起きているということなのか。

「待ってくれ。それなら灰谷や黒木さん、陽平から連絡があるはずじゃないか。様子がおかしいって」

その連絡すらない。陽平にいたっては、お札を貼り終えたという連絡すらもないのだ。これほど苦戦するような仕事でもないのだ。

「そうか……そうだよ。って、キョウカ！」

「あっ！」

この異常事態の中、京香ちゃんを一人にしておくのは危険だ。

連絡がなかった。

気づいていないだけ、なのか？

違う。嫌な予感がする。

部屋を出て、ノックもせず京香ちゃんの部屋のドアを開ける。

「京香ちゃん！」

駆け込んだ部屋の中には、虚ろな表情の京香ちゃんが立っただけだった。

人影京香。

人影宗次。

兄妹にして、鏡の向こう側。

概念個体。

それが一体どういうものなのか、ぼくには理解できていない。わかることは、宗次と京香ちゃんは、本当に似ているように思えないのに、似ていると思ってしまうということだ。話し方も、仕草も表情も、何から何まで違うのに、ぼくは彼らが似ていると感じてしまう。

それが鏡の向こう側ということなのか、ぼくにはわからないけれど、ぼくの間感として、それで十分だと思う。

「京香ちゃん？」

京香ちゃんは部屋の真ん中で、幽鬼のように立っていた。

「……………拓さん」

力ない声。生気が感じられない。さっきまでは顔色はともかく、声には力があつたのに。

進まない時間が、関係しているのだろうか。

「黒木さんは？」

「……………『ここ』にはいないよ」

あの人……………京香ちゃんを置いてどこに行つたんだ。

「キョウカ、ちょっと辺りの様子が変なんだけど、何かなかった？」

何かあつたのだろう。そうでなければ黒木さんはいなくならな
だろつし、京香ちゃんだって、生気なく立ちつくすことなんてない。

「反転世界」

「え？」

「反転世界リバーサルワールドって言うてわかるかな？ リゼさんも拓さんも、パラレルワー並行世界は知ってるよね？ それとよく似たものだよ」

この世界と同じものを起源とし、違った発展を遂げた別世界。もうひとつの可能性。

「じゃあ、ここは異世界だってことか？」

信じられない。ぼくは何の変化も感じなかったし、時間の流れ方の違いさえ気づかなければここにもいない。

「そうだよ。ここはよく似ているけれど、違う世界。ううん。厳密には同じ世界だよ。違うのは、あたしたち以外に、この場所に誰もいないこと」

「っ！」

この場所にぼくたち以外はいない？

「どうということ？」

リゼが焦りの色を隠さずに問いかける。

「そのままの意味だよ。ここはあたしが創り出した鏡面世界だから鏡の向こう側。」

反転。

「ほかの人たちはどこに？」

「拓さん、いないのはあたしたちのほうだよ。今頃、『向こう』であたしたちがいなくなっただって言ってるころだと思っ」

「キョウカはどうして、こんな世界を創ったの？」

もっともな疑問。しかし、それを京香ちゃんは話してくれるのだろうか。

もう一つの世界を欲するということ。それはとても、とても重大なことだ。そんなことをする理由を、ぼくたちに話してくれるものなのか。

「……元の世界にいたら、あたしは死んじゃう」

意外にも口を開いた京香ちゃんが発したのは、予想外すぎる言葉だった。

「え？」

「は？」

死んじゃう？

なんで、どうして。

今まで 中学三年生の十五歳になるまで、平気で過ごしてこられたというのに。宗次もピンピンとしている。いや、そうならこれは空気が合わない、というような理由ではないのだ。

もっと、致命的な何か。

自分が生きていくことを疑問に思うほどの何か。

「あたしの存在を嫌うクラスメイトたちに殺される。あたしたち虚構は意思や、概念、そういう力によって存在してるから、存在を否定されると消えちゃう」

『消える』。

クラスメイトたちが、京香ちゃんに向ける視線。『アカガミさま』に託された呪い。それはたしかに、京香ちゃんを世界からはたき出そうとしていた。

「だから、あたしはここに避難したの」

「だったら、どうしてわたしたちもここにいるのかな？ 避難なら、キョウカだけがすれば事足りるでしょ？」

京香ちゃんは涙を溜めた目をぼくたちに向け、そしてこちらに走ってきた。

「京香ちゃん？」

京香ちゃんはそのままぼくに飛びつき、しっかりと腰に手を回した。リゼはというと、京香ちゃんを見て、本当に困った顔をしていた。

「うぐっ……」

どうしたものかわからずオロオロしていると、京香ちゃんが嗚咽をもらしることに気づいた。肩を震わせ、たまった感情を吐き出す。

「……うぐ……ひっく……」

リゼが泣いてたときはもっと激しかったな、なんて思っていると、リゼに睨まれた。心が読めるのかもしいれない。

京香ちゃんの背中をあやすようにさする。それがいけなかった。

京香ちゃんはさらに激しく　結局、大泣きしてしまった。

「拓さん拓さん拓さん！」

何度もぼくの名を呼び、ぼくに助けを求めるように、腰にまわした手に力をこめる。

「あたし……死にたくないよ！　消えたくない！」

「……………」

この子は追い込まれていた。どうしようもないほどに。それでも学校に通い、ぼくたちに心配をかけることを恐れていた。そして、こんな世界を創り上げた。

「うあああああ！」

荒ぶる感情は、言葉を悲鳴に変えた。

もしかしたら、ぼくたちがここにいるのは、京香ちゃんに必要とされたからかもしれない。ぼくたちがいなければ、京香ちゃんはこの世界で独りになってしまう。

「リゼ」

「うん」

「ぼくは許せないよ」

「うん」

「でも、どうしたらいいのか、わからないんだ」

「……………うん」

相手は中学生。虚構ではない、純粋な人間。陽平の言葉では、京香ちゃん以外と接する場合、本当に気のいい連中。まあ、そんなことは関係ない。

関係ない。

「最近暴力的な解決方法が多かったから、こういつ時どうすべきかわからなくなるんだ」

「そうだね」

「もしかしたら、あまり良いことじゃないのかも知れないけれど、学校に出向いてもいいかなって思うんだ」

「うん」

リゼは京香ちゃんを見つめていて、声なく泣いていた。とにかく、今は京香ちゃんが泣き止むのを待とう。

全ては それからだ。

京香ちゃんをひとまずリゼに任せ、ぼくは外に出た。ぼくたち以外がない世界。それは人間だけにとどまらず、その他の生命体が存在しなかった。川の流れも止まり、『活動』が止まっていた。

「地球は回ってるのかな？」

どうでもいい疑問が浮かぶ。しかし、ここは京香ちゃんの意味が創り出した世界。ぼくたちは地球が回っていることを意識しない。そもそも地球を意識しない。だから、回っていない、というよりもこの町の外はないのかもしれない。

京香ちゃんの溜め込んでいた感情は、ぼくが思っていたよりも大きなものだった。小さな子どものように泣き、ぼくはこうして外に出てきているわけだけど、本当は京香ちゃんのそばにいたほうがよかったのかもしれない。

必要とされて、この世界にいるのだから。

そばにいないなら、意味がないのかもしれない。

空はまだ明るい。太陽の位置も変わらない。もし、この世界が、京香ちゃんがこの世界を創り出した瞬間の世界だとするなら、ぼくが京香ちゃんを見つけたときには、すでに世界は変わっていたということだろうか。

「何にも、違和感はなかったよな……」

どういう条件でこの世界に入ってきたのか、その自覚がない。どこがきっかけで世界が変わったのか、ぼくにはわからない。

「これじゃ、催眠術よりも酷いよな」

催眠術だつて準備行動を必要とする。かかりやすい体質とか、そういうものはあるらしいけれど、それでも一瞬でかかることなんてないのであるのか。けれど、これは一瞬。ぼくになにも感じさせ

ず、リゼですら何も感じなかった。黒木さんもこの世界には入ってこなかった。いや、彼女の場合、気づいていて入ってこなかったのかもしれない。

「あれ？何かひっかかるな……」
「なんだろう。何かおかしい気がする。何かが欠けているような気がする。」

京香ちゃんが創り出した鏡面世界。

連れてこられたぼくとリゼ。

『アカガミさま』。

誰もいない世界。

「ぼくたち三人以外に誰もいない？」

本当にそうなのだろうか。いや、ぼくがこうして外を歩いている限り、生命体なんて見かけていないけれど、一人くらい、そう、一人くらいいたっていいんじゃないだろうか。

いてほしいとさえおもう。

「どうなんだよ、宗次」

妹が非常事態なんだぞ。

それとも、京香ちゃんに弾かれてしまったのだろうか。拒まれてしまったのだろうか。

仲の良い兄妹。

そんなイメージだった。違うのだろうか。

「たまたま、会えてないだけだよな」

京香ちゃんの復活を待つこと、それだけしか今はできない。

「あれ？」

今誰かが通った気がしたけれど。気のせいだったのだろうか。

しばらく町を歩いてみたけれど、やっぱり誰にも会わなかった。鳥すら見かけなかった。ただ、一度だけ見かけた人影が気になる。

「ただいま」

部屋に入ると、京香ちゃんはすでに泣き止んでいた。頬に涙の痕あとが残っているけれど、その瞳には力が戻っていた。

「おかえり、タク」

「おかえりなさい、拓さん」

部屋にはちゃぶ台が出され、お茶が準備されていた。すぐに京香ちゃんが、ぼくの分も出してくれた。

「ありがとう」

「うん」

どこかぎこちない空気のまま座る。

話の切り出し方がわからない。リゼと出会うまで、ぼくは平凡な学生でしかなかった。こんな深刻な空気になることもなかったし、ましてや異世界に来たことなんてなかった。誰かに説明責任を突きつけたこともなかった。ただ、どうしても聞いておきたいことがある。

「京香ちゃん、一つだけ、どうしても聞いておきたいことがあるんだけど」

「うん」

京香ちゃんは緊張した。いや、萎縮した表情でぼくを見ていた。怒っていると思っっているのかもしれない。

「宗次は、どこにいるの？」

京香ちゃんの目は見開かれ、ぼくの質問に驚きをおぼえていた。

「お兄ちゃん……いないの？」

とても弱弱しい声。それはまるで、宗次がこの場所にいないことが信じられないと言っているようだった。

「やっぱり……いないんだ」

「京香ちゃん、やっぱりってどういうこと？」

「お兄ちゃんはいつも働いてるから、遠くにいたんだと思う。この町から出てたら、この世界には入れないから」

「ということは、宗次は京香ちゃんの意味でこの世界にいないというわけではないのか。」

「ねえ、キョウカ」

「……？」

「この世界って、外から入って来れないの？ 例えば誰かがこの世界に気づいて、とか」

「真っ先に思い浮かんだのは、宗次と黒木さん。」

「お兄ちゃんなら入ってこられるよ。あたしたちは同じだから」

「今日は宗次、何時まで仕事なの？」

「もしかしたら、そろそろこの世界の存在に気づくかもしれない。」

「今日は帰ってこないよ。明日の早朝に戻るって言ってた。仕事の後に仕事仲間のおごりで飲みに行くんだって。お兄ちゃんは飲まないけど」

「一応十六歳だし。」

「そんなことより、ということとは外からの干渉はないってことか。」

「ていうか、今何時だ？ 十時くらいにはなってるんじゃない？」

「時間まではさすがにわからないよ。感覚で感じるしか。ねえ、拓さん、外に出たいなら今からでも出られるよ？」

「でも、今出たら京香ちゃんは一人になるじゃないか」

「文字通り、一人。独り。誰もいない世界の中で、ただ独りだけ存在する。それはこの上ない孤独だ。そんな苦しい思いを京香ちゃんにはしてほしくない。」

「京香ちゃん、京香ちゃんは存在する力さえ戻ればこの世界から出られるんだよね？」

「う、うん」

「え？ タク、心当たりあるの？」

「いや、ない。けど、何かあるかもしれないだろ？ それを考えるんだ」

一度だけ見かけた人影も気になる。

「ぼくはもう一度外に出てくるよ」

「え？」

と、京香ちゃんが声を上げる。

「リゼは京香ちゃんと一緒にいてあげて」

「うん」

二人を残して部屋の外に出る。アパートの敷地から出て、ふと曲がり角に目が行くと、また人影を発見した。

「待って！」

影のほうに走る。

角を曲がると、その人物はぼくに背を向けて立っていた。

「やあ、虚構を殺す者」

ぼくを振り返ることなく、その人物は言う。

「よお、リンクス。どうしてここにいるんだ？」

ここは京香ちゃんに選ばれた、この世界にいてもいいという『許可』を得た存在しか入れられないはずだ。

「ぼくは 旋風に生きる者。 風に異変が起きれば、すぐにわかる。次元変異の気配を感じ、さらにその中に、ぼくが知っている気配があったから、入ってきてみた」

「気配って、そんなのわかったのか？ というか、どうやって入ってきたんだよ」

「まあ、風が教えてくれただけだから、実際に気配を感じたわけじゃない。どうやってと聞かれても、入り口と思われる裂け目から堂々と」

滅茶苦茶だ、この子。なにがと聞かれても困るけれど、ぼくが今まで会った虚構の中でダントツだ。

「この世界を作った本人は、外部からは入ってこられないって言うてたけど」

「それはこうして完成してからだと思う。現にぼくは、こうして入っているわけだから」

「そう言われればそうだよな」

こいつに対しては、どんな小細工も通用しないのかもしれない。

「で、虚構を殺す者。ぼくを呼び止めて何の用だ？」

「何の用ってお前……あ、頼みがある」

「嫌だ。ぼくはこんな世界を創り出し、その上、無関係の人間を巻き込むような奴を助けたりなんかはしない」

無関係な人間。それに自分が含まれていないことは、リンクスの声からわかった。

「……知ってるんじゃないか」

「どうしてこんな世界を作ったかまでは知らないが、こういう世界を作るとなると異常としか言い様がない」

「こんな世界を作らなくちゃいけないほどまで、追い詰められた子がいるんだよ！」

「必死だな」

どうでもよさそうに、リンクスは言う。

「当たり前だ！」

「大切なのか？」

「ぼくの妹みたいな子だよ！……家族なんだ」

正確には違うけれど。だけど、ぼくにとってあのアパートの住人は、家族のような存在だ。

「……確認したいことと条件がある」

「なんだ？」

どんな条件でも飲んでやる。京香ちゃんを助けられるなら。

「お前の住んでいるアパート、部屋は空いているか？」

どんなことを聞かれるのか、いささか不安な気持ちで待っていたぼくに届いたのは、そんなよくわからない質問だった。

「あ、ああ。二部屋空いてる」

アパートに空き部屋があることが重要になってくるのだろうか。

けれど、リンクスの言葉はまたぼくの予想を裏切るものだった。

「ぼくをアパートに住ませてくれるなら、その『妹みたいな子』とやらを助けよう」

「そ、そんなことでいいのか？」

もつところ、ほかにないのか？

「駄目か？」

その「駄目か？」と聞く声が、どこか寂しげだった。

「い、いや、そんなことはない！ いや、ぼくの一存じゃ決められないけれど、リンクスが助けてくれるなら、最大限の努力をする！」

「なんだ？ 飲めないのか？」

「そういうわけじゃない！ こう……人間社会のしがらみだよ！」

「……納得した。案内よろしく」

「あ、ああ！ こつちだ！」

といつてもすぐそこだ。一つ角を曲がり、三分と歩かないうちに部屋に入った。

「おかえり、もの凄く早かったね……って、リンクス？」

出迎えてくれたのはリゼで、奥で京香ちゃんが、驚いた表情でこちらを見ていた。

「久しぶりだな、鮮血に生きる者。虚構を殺す者の妹のような存在を助けに来た」

「へ？」

「だあ！ リンクス、余計なことを言わなくていい！」

リンクスは不思議そうにぼくを見上げていたけれど、すぐに部屋の奥にさがりこんでいった。

「え？ あの……」

突然目の前まで歩いてきた、同年代のように見える少女に対し、京香ちゃんは戸惑いの声を上げる。

「ぼくは 旋風に生きる者。虚構を殺す者に頼まれ、お前を助けに来た」

「え？ あたし？」

その時、京香ちゃんがぼくに向けた視線は、なぜかとても悲しげだった。

「え？」

しかし、京香ちゃんはすぐにぼくから視線を外し、リンクスのほうを見た。

「あたしの存在する力、戻してもらえますか？」

「ああ」

短く答え、リンクスはぼくたちに向き直った。

「二人はちよつと外に出ていてもらいたい」

「えっ！」

と、声をあげたのは京香ちゃんだった。

「できるだけ他人には見られたくない。安心していい。ぼくは旋風に生きる者。決して虚構を殺す者の妹のような存在 いや、虚像なる者、お前を傷つけるようなことはしない」

リンクスはそう言ったけれど、初対面の相手にそんなことを言われたからといって、すぐに信用することもできないといった、京香ちゃんの表情だ。しばらく逡巡した後、京香ちゃんはゆっくりとわずいた。

「うん。じゃあ、二人は出ていてくれ」

「あ、ああ」

後ろ髪引かれる思いで部屋を出、それでもリンクスならなんとかしてくれるだろうと、どこか確信に似たものを感じていた。

「大丈夫かな？ キョウカ」

「安心しろって。リゼだってリンクスに助けられたときは一人だったじゃないか」

その時のことを思い出したのか、リゼはうーん、とうなった。

「そうなんだけど……」

「あいつは嘘はつかないよ。リンクスは自分の言葉に誠実だから」
突然学校にやってきて、ぼくたちに話しかけてきたあの時も、リンクスは一切の嘘を言わなかった。嘘になるようなことも言わな

った。

「タクはあの子のこと、信じてるんだね」

「ああ。まだ会って間もないけどね。でも、不思議と信じられるんだ」

それが 旋風に生きる者 の特性なのかもしれないな、なんて思ったりもする。あらゆるものに束縛されず、自分の意思によって行動する種族。

「じゃあ、信じることにするよ。わたしも助けてもらったしね」

リンクスには助けてもらってばかりだ……。今度、何かお返しでもするとしよう。今回の条件とは別に。

現実世界に戻り、ぼくたちは黒木さんと千堂さんに笑われ、吉岡さんに泣きながら怒られた。陽平は京香ちゃんの手前、それほど語気を荒げることにはしなかったが、それでも何か言いたげにしていた。京香ちゃんと二人で話している場面もあったから、もしかしたらそこで何かを言ったのかもしれない。

宗次は結局現われず、あいつには今回の騒動のことを伝えないことにした。あいつはあれで結構繊細だから、こんなことを伝えて

伝えるべきなのだろうけれど 倒れられてはどうしようもない。

「中学校には、あたしのほうから連絡しておいたよ。まったく、いらないものが流行ると迷惑だね、ほんと」

「え？ それだけの対応で済ませたんですか？」

もつと厳しい対応をしてくれるとばかり思っていたぼくは、拍子抜けし、少し腹が立った。

「少年、気持ちはわかるよ。でも、そんなことをすると、京香ちゃんの居場所はもつと少なくなるし、京香ちゃんが人外だつてことも話さなくちゃならなくなる。そうなつたら……わかるよね？」

諭すように言った黒木さんの表情は、言葉とは裏腹に悔しそうだった。

「佐倉少年に張ってもらった札があるから、これから何年かは中学校内において呪術は使えないよ。それこそ誰かが気づいて、あの札が発揮している結界を解除させないと」

ひとまず、『アカガミさま』による被害はなくなるだろう。けれど、人を呪い、危うく殺しかけた同級生たちは、その事実を知らない。結局のところ、解決にはなっていないのかもしれない。

「人を呪わば穴二つ……。そうしたいかい？ そうなつたら、彼らが助かる術はないだろうね。だって、彼らにはあたしたちみたいな、助けてくれる人なんていないんだから」

後味も悪いよ。と、黒木さんは付け足した。

申し訳無さそうに話す黒木さんを見てみると、なんだか申し訳なくなってきた、ぼくはそこで話を終えた。

よくわからなかったのは、ぼくたちが現実世界に戻った時、リンクスが姿を消していたことだった。交換条件として、あの安アパートに住むことを提案してきた彼女。けれど、事件が終結し、数日たった今でも、彼女はぼくたちの前に姿を現していない。

この町から出て行った。

そんなことも思ったけれど、彼女は自分の言葉に誠実で、嘘はつかないと思っている。だから、きつとまだこの町にいるはずなのだ。黒木さんに頼んで、管理人さんに話をつけてもらっているから、あとは本人が来ればいいだけなのに。

「別れの挨拶だったのかもね」

リゼが言う。

「どういうこと？」

「旅人って言うてたでしょ？ だから、町を去る時にそこで出会った人に別れを言うのに、少し抵抗もあったんじゃないかな？」

「旅人なら、別れには慣れてるはずじゃないのか？」

「あつ、そっか」

けれど、それも案外ない話じゃないのかもしれない。

ぼくにはわからないけれど。でもまあ、二階の吉岡さんの隣の部屋。そこはリンクスの為の部屋になっている。

「タク」

「うん？」

リゼは窓から顔を出して、グラウンドを歩く、明らかに学生じゃない格好をした人物を指差した。

「あれ、リンクスじゃない？」

「あ」

その人物はぼくたちの視線に気づいたのか、それともぼくたちが気づくのを待っていたのか、こちらに振り返り、少しだけ恥ずかし

げに手を振った。
銀色の髪が、風にゆれた。

9 (後書き)

次回、閑話『灰谷琴音の物思い』
お楽しみに。

灰谷琴音の物思い

オレがどうしてこの世界にいるのか、それがいつも疑問だった。いや、違う。オレが疑問なのは、どうしてオレが人の姿をしているのか、ということだ。平野はオレがこの世界にやってきたとき、その代わりにオレの世界に行った人間の姿だろう、と言っていた。もしそうなら、オレはこの世界の一人の人間の人生を狂わせたことになる。

自分を責めているわけではないのだが、どうしてもそういう思いは抜けない。

リゼはどのようなだろう、と一度リゼに聞いてみたところ、リゼ本人は自分の姿が変わっているわけではないということだ。なら、どうしてオレは擬人化という技術を身につけたのか。それがよくわからない。

「わからなくてもいいんじゃない？」

細江はそうオレに言った。元々人に愚痴るような性格ではないが、なぜか細江に愚痴っていた。

「どうしてだ？」

「灰谷さんがいてくれるの、わたしはうれしいよ？」

「？」

どうして細江がうれしいと問題ないのか、オレにはわからなかった。

「今灰谷さんがここにいること、それが大切なんだよ。わたしや、他のみんなにとって」

それはきくと、自分の目が届く範囲が自分の世界となっているからで。

それはきくと、他のすべての人がそうなのだろう。

そしてきくと、オレもそうなのだ。

「今だから聞けるのだが」

「うん」

「オレがドラゴンであることや、リゼが吸血鬼であることは関係ないのか？ 怖くないのか？ ドラゴンも吸血鬼も、物語の中では人に害をなすものだぞ」

人は知らないことを探求し、解答こたえを求め。そして『知らないこと』を恐れ、『わからないこと』を嫌う。そういう種族ではないのか。

「リゼさんはわたしたちに出会いがしらで自分が吸血鬼だって暴露したし、灰谷さんは自分の正体を隠してたのに、石動くんを止めるために自分がドラゴンであることをみんなに知らしめた。リゼさんも灰谷さんも、実質的にわたしたちに対して害を及ぼしてないよ？ たぶん、クラスの誰も灰谷さんたちを怖がってる人なんていないんじゃないかな？」

興味がある人はいてもね。

「そんなものか？」

「人間って、複雑そうで単純なんだよ。でね、単純だと思えるところが、実は複雑だったりするの。だから、うん、灰谷さんが感じたとおりが正解なんだよ、きつと」

また細江は難しいことを言う。矛盾をはらんだその言葉。けれど、細江にとってはそれが解答なのだろう。

「人は難しい」

細江はオレの呟きに対し、優しげな笑みを浮かべた。

帰宅途中、変な生き物を見つけた。

長い耳。醜い顔。鋭い爪。異形の羽。

これは確か、インプとかいう下級の使い魔ではなかったか。オレが見るのは初めてだが、なかなかどうして気持ち悪い。

「術者には悪いが、インプを使う奴なんてロクなのがいないらしいからな。いいか」

インプがこちらに気づかないうちに、オレは後ろから炎を吹きかけた。インプは一瞬で灰になって消えた。

歩いていると、また見つけた。

炎を飛ばす。

「多いな」

世界学というものは、意識してみると、あからさま過ぎるほどに現実に浸透しているらしい。そのための情報規制だというのに。人の想像力というものは、やはり、なかなか素晴らしいものだ。

そんな甘いことを考えられていたのもつかの間のこと。

翌日、『オレたち』の世界には醜い使い魔が跋扈していた。
なるほど。

オレがここにいることが大切だと言うのなら、この場所を守るために一肌脱ぐのも悪くないかもしれない。

灰谷琴音の物思い（後書き）

次回、最終話 探していた場所
お楽しみに。 0

0 (前書き)

『スクランブルワールド2』も、はや最終話となりました。
残りわずかですが、最後までお楽しみください。

「早く姫さまに会いたいものですな」

赤い目を光らせながら、どこか姿に違和感のあるカラスが言う。

「そうだな。しかし……どうして姫さまの魔力の波動は突然消える？」

小型の、カラスよりも小さな影が言う。

その姿は町を襲ったインプをほうふつとさせるが、あのインプのような邪悪さは感じられない。

「なんらかの結界が張ってあるのでしょうか。もっとも、旋風に生きる者のような種族には通じないでしょうが」

「なら、一応安全ということか？」

「どうでしょうね？ ワタクシたちがこちらに飛ばされて、最低でも一ヶ月は経っています。それに、少し前にはあの『大怪異』もありましたし。こちらへんも、あまり治安はよくないのではないかと」

「『大怪異』？ ああ、あの魔術師が起こしたというあれか。人為的なものとはいえ、あれだけのことができるんだったな。注意も必要か」

「でしよう？ ならば早く姫さまを見つけて元の世界に戻らなければ」

「戻る方法もわからんがな」

お互いに苦笑し、夜の闇に消えた。

黒木さんが中学校に苦情を申し立てたことにより、中学生の中で『アカガミさま』は急速に廃れていった。学校がどういった対応をしたのかは知らないけれど、夏樹がそう言っていたから、きっと正しい情報なのだろう。

だからといって、京香ちゃんが受けた傷が癒えるわけではないのだけど。

「おう、今日も来てるな、石動」

朝のHRで山岸が石動の顔を見て、笑顔で言った。

「出席日数がヤバイだろうからな」

ぶっきらぼうに石動は言ったが、山岸はそんなことはどうでもいいらしく、どこまでもうれしそうだった。なんだかんだ言いつつも、山岸は石動が学校に来ていなかったことを気にしていたようだ。

気にしない教師はいないか。

今朝のHRは、山岸が家庭の愚痴をぼくたちにこぼすことで、その時間を終えた。ぼくたち生徒としてはこの上なく楽でいいのだけど、教師としてそんなことでいいのだろうか。

「あ、あのよ、灰谷にリーゼと平野」

「うん？」

「なんだ？」

「なにかな？」

山岸の今後について、どうでもいい議論を交わしていたところに、意外な人物がやってきていた。というか、休み時間に話しかけてくるとは、思いもしなかった。

「い、いや、放課後ちよつと時間あるか？」

「ああ、ぼくは大丈夫だけど。二人は？」

リーゼには用事なんてないだろうけれど。

「オレはない。ただ、お前に放課後の呼び出しをされると、少し怖

いな」

灰谷はわざとらしく身震いをして見せた。

「別にそんなこと考えてねえよ」

バツが悪そうに石動は言った。

「わたしも大丈夫だよ。どーせ拓と一緒に帰ることくらいしか予定ないし」

「じゃあ、放課後ちょっと残っててくれよ」

そう言って、石動は教室から出て行ってしまった。

「なんの用事なんだろうね？」

リゼが首を傾げる。

「わたしのこと、初めて名前で呼んでたし」

「リーゼとお前を呼ぶのを聞くのは、久しぶりだな」

灰谷がどうでもよさそうに言った。

「久しぶりっていうより、初めてじゃないか？」

「あの機関とやらの男だけはそう呼んでいた」

あれもカウントするのか。

「おい、っーかよ、お前らホントに行くのか？」

さっきの話を聞いていた夏樹が、少しだけ不機嫌そうに言う。

「え？ 行くけど。どうかしたの？ ナツキ」

「どうかしたのって、リゼちゃん。ほいほい言われたとおりに行って、何かあったらどうするんだよ」

夏樹の言いたいことはわかるけれど、ぼくには『何かがある』とは思えなかった。二度にわたる大喧嘩、その両方ともに石動は敗退（なんだか変な言い方だけど）している。それにもかかわらず、また突っかかってくるとも思えなかったし、アイツの場合そういうこととは堂々と正面からやってくる。畏とか、そういうことはしないだろう。

「心配ないと思うけど」

「同感だな。足立、少しはクラスメイトを信じたほうがいいんじゃないのか？」

「お前ら、あいつに何言われたか忘れたのかよ」

呆れたとばかりに、夏樹はため息をついた。

「忘れてなんてないよ。ただね、わたしはそういうことを、あんまり根に持ちたくないんだよ」

「オレはそれ以前に、言われた直後ならまだしも、時間が経てば気にならなくなる」

二人とも、人間では考えられないほど、さっぱりした性格の持ち主のようだ。夏樹も驚きなのか呆れなのか、開いた口が塞がらないようだ。

「足立、お前はそういう心配なんかしなくていいから、いつもどおりの馬鹿でいてくれ」

「あん？ オーケーわかった。俺に任せておけ！ っておいおいおいおい！」

ベタベタなノリツッコミが披露され、休み時間は終了した。

昼休み。今日は久々に全員というか、まあ、みんな揃ったの昼食となった。いつもと違うのは、もう入梅してしまっていて、あの中庭では昼食をとれなくなってしまったことだ。

「パラソルでも立てるか？」

夏樹がやけに真剣な顔で言うので、ぼくは呆れながらその提案を却下した。もしぼくが却下しなくても誰かがそうしたはずだ。

「俺は本気だぜ？」

「だからわざわざ口に出して却下したんだろうが」

ふつつなら無視するところだが、夏樹の場合は無視すると実行しかねない。

「わたしは悪くないと思うけどなー」

お茶を飲みながら、リゼがそう呟く。

「だろ？ やっぱりリゼちゃんはわかってるよな」

すかさず夏樹がそう言っつて、灰谷に鼻で笑われていた。

「なんだよ」

「いや、なんでもない。リゼが同情してくれてよかったな」

夏樹は泣きそうな顔で 実際泣いているのかもしれない
リゼに向き直った。

「ど、同情から来た言葉？」

「え？ いや、わたしは外で食べるほうが好きだから……」

夏樹の勢いに若干引きながら、リゼはそう言って笑う。少し引き
つった笑みだった。

「リゼ、あまり足立は甘やかさなくてもいいぞ？」

「そうだよ。足立くんは甘やかすと調子に乗り出すんだから」

細江さんも灰谷に続く。夏樹はというと、ズンズンと気が沈んで
いつている。さすがに可愛いそうだな、とは思いつつも、ぼくは手
を差し出すことはしなかった。

「手を差し出せ！ 親友よ！」

「がばり、と夏樹が体を起こす。

「きゃっ」

隣に座っていたリゼが、夏樹の勢いに驚いて小さな悲鳴を上げた。
……そういえばリゼの悲鳴って初めて聞いたんじゃないか？

「お、わりい。それより、拓よ、どうして俺に手を差し出さん！」

「……手を差し出さないという優しさ」

「優しさ、なのか？」

「そうだ」

もちろんそんなはずないのだけど。

「そうか。優しさか」

「見捨てる優しさ」

ボソツと灰谷が呟く。

「っ！ なんだかもう、俺が愛されてるみたいに感じるぜ
！」

「こいつは馬鹿だ。」

「足立くん……」

細江さんが、可愛いそうなものを見るような目で、夏樹を見てい
た。

授業も全て終わり、普段ならあとはアパートに帰るだけなのだが、今日はそうにもいかない。

教室にはぼくとリゼと灰谷の三人だけがいた。ぼくたちを呼び出したはずの石動は、同じクラスの同じ教室なのにもかかわらず、この場にはその姿がなかった。

「呼び出しといて忘れたか？」

「タク、それはいくらなんでも……」

「あいつのことだ。どうせ人気がなくなるのを待ってるんだろう」「人気が言ってもな……。教室内には三人しかいないわけで。」

「他のクラスもいるだろ？　もしかしたら、オレたち以外には聞かれない話題なのかもしれん」

「だね。そうじゃないなら、休み時間で十分だし」

他の連中に聞かれなくて、ぼくたちだけを呼び出すようなこと、か。そりゃまあ、心当たりが全くなかったというと、少しはあるわけで。どう考えても、虚構がらみであることには違いないんだよな。

「それにしても遅いな」

灰谷がため息と共に呟く。

放課からすでに二十分が経っている。さすがにちょっと待ちきれない。

「帰るか？」

「え？　帰っちゃ駄目だよ。近くにいると思うから、少し見てくるよ」

「あ、ああ」

リゼは立ち上がって、教室から出て行ってしまった。

期せずして灰谷と二人だけになる。だからといって、どうということもないのだが。

「オレはあまりこの手の話には興味はないのだが、お前、リゼと付き合い始めたのか？」

灰谷までそんなことを思っていたのか。少し意外だ。

「付き合ってるじゃないよ。みんながそう思ってるだけさ」

リゼが意識を取り戻してから、そんな質問ばかりだ。うんざりする、とまでは言わないけれど、いい加減その質問には飽きた。

「なんだ、付き合ってるじゃないのか」

灰谷は意外そうにそう言った。

本気で付き合い始めたと思っていたらしい。

「お前たちのことだから、アイーナの一件くらいから付き合い合っているものだと思っていた。最近になってそれが露見し始めたと思っていたくらいだ」

「さすがにそれはないよ。よく考えてみるよ。あの事件の頃なら、ぼくたちは出会って一ヶ月も経ってないんだ。今やっと一ヶ月くらいだろ？」

「出会って一ヶ月のスピード婚も巷では起きているらしいがな」

灰谷は苦笑し、続けて小さなため息を漏らした。

「なんだよ」

「いや、自分の勘違いが恥ずかしくなったただけだ」

「あ、そうっすか」

「こいつにも『恥ずかしい』という感情はあったのか。勉強になる。どうでもいいことで感心していると、リゼと石動が教室に入ってきた。」

「すまん、待たせちゃまって」

開口一番に石動はぼくたちに頭を下げた。それがあまりにもぼくたちに向かってかかってきたときの石動と違って、少し焦った。

「い、いや、気にするな。で？ 用ってなんなんだ？」

リゼは灰谷の隣に座った。石動はたったまま、どの椅子にも座ろうとはしなかった。

「座らないのか？」

「いや、いい」

言い切ると同時、石動はぼくたちに向けて頭を下げた。

「すまない！」

「何についてだ？」

「何について……俺、お前らに色々言ったたる」

自信の無い声で言いくそうに言う。いやまあ、言いくいことではあるけれど。

「ああ、そのことか。気にするな。お互いさまだ」

「お互いさまって……そんなレベルの話じゃないだろ」

「そうか？ オレにとってはその程度の話なんだが。なあ、リゼ？」

「え？ うん。そりゃまあ、いきなり吸血鬼だのドラゴンだの言われたら混乱するよね」

リゼも石動の言葉など全く気にしていない、とにこやかに笑う。

ぼくも笑って済ませてやろうと思ったけれど、さすがに笑顔は見せられなかった。

「大体、クラスメイトたちの順応能力が高すぎるんだ。リゼが入ってきたあの日のことは、今でも覚えているぞ。あまりに気持ち悪くて」

「ああ、確かにあれは凄かったな……。関心が無さそうだったのは灰谷だけだった」

そして、一番反応したのが灰谷だったか。

「でもあんな質問して、そのまま放置だからな」

一瞬だけの興味。そんな感じ。

「石動」

話しの流れを完全に断ち、灰谷が石動を呼んだ。

「世界学を、信じるか？」

「え？」

「正直に言え。お前は世界学を信じるか？」

灰谷の質問に、石動はじつと黙って考えていた。

やがて、ゆっくりと口を開いた。

「信じない」

きっぱりと、断言した。

「俺は世界学を信じない。それはこの先何があったとしても、変わらない」

灰谷はうなずいた。

「じゃあ、お前にとってオレたちは『何』だ？」

「クラスメイトだ」

石動は断言し、灰谷はうなずいた。何かを納得したようだ。

「オレはその言葉だけで十分だ」

灰谷は鞆を取り立ち上がった。

「お、おい」

「お前は目の前の変化に少し、混乱しただけだ」

一言だけ、呟きを残して灰谷は教室から出て行った。

男前なやつだ。

「アキヒコ」

灰谷の背中を見送っていた石動が、リゼに向き直る。

「反省してる？」

「……ああ」

自分の言葉をかみ締めるように、石動は神妙にうなずいた。

「うんっ。じゃあタク、帰ろ」

さっと立ち上がり、リゼはぼくの手を取った。

「ああ」

うなずき、ぼくも立ち上がる。それから、石動のほうを見る。

「石動」

目と目が合う。

「学校はあんまり休むもんじゃないぜ？」

石動は目を見開き、すぐにうつむいてしまった。

「リゼ、帰るぞ」

「うん」

今日は、本当にいい日だ。

昇降口まで降りると、灰谷が立っていた。

「よう」

「ああ」

「帰ろっか」

それ以降の会話は一言もなかった。

ただ、妙に晴れ晴れとした、すっきりとした気分だった。それは決して石動が謝りに来たからではなく、歪んでいた軸というかネジというか、日常の歪みが解消されたという実感があつたからだ。

一言も交わさなのまま、ぼくらは灰谷と別れた。

夜は吸血鬼の時間だ。

深夜零時。突然リゼがぼくの部屋にやってきた。

「どうしたんだ？ こんな時間に」

リゼにとっては『朝』なのかもしれない。吸血鬼が本当に夜行性ならば。

「ちよつと歩いてみない？」

「歩くつて、外をか？」

「うん」

どうだろう。この時間に出歩けば、確実におまわりさんに補導されてしまうのだが。

リゼの申し出を断るのももつたいないような気もする。

「補導されるかもよ？」

「大丈夫。そこはわたしが何とかするよ」

そう言われてしまえば断る理由なんてない。明日の朝が少しだけ心配だけど、頑張れば済む話だ。

「わかった。でも、少しだぞ？」

「わかってるよ」

リゼに続いて外に出る。こんな時間に外を出歩くのは、当然ながら初めてのことだ。少しだけ新鮮な気分になれて、そういう意味ではリゼに感謝してもいい。

夜の町は静かで、深夜ということも手伝って家からこぼれる明かりは少ない。梅雨入りして、最近は雨が多く、空気はじっとりしていた。

「わたし苦手だな、この空気」

「日本だから仕方ない。外国なら乾燥した夏を過ごすこともできるけど」

高温多湿の夏。

悪夢以外の何物でもない。

「わたしがいた場所は『季節』はそんなに明確じゃなかったかな」
「そうなんだ」

四季が楽しめること。それは日本の大きな魅力と言える。

「だから少し楽しみなんだ。季節が移り変わっていくのを感じるの
が」

「わかるよ。ずっとそれが当たり前のぼくたちでも、それが楽しい
んだ」

始まりと終わりの季節、春。

情熱と恋の季節、夏。

憂愁と活動の季節、秋。

回想と決意の季節、冬。

場所は同じでも、時によってその表情を変える。

「ふたりで、それを見ていきたいんだ」

リゼの赤い目は、遠くを見ていた。それはきっと、これからの生
活への希望で。

期待だ。

未知のものへの期待。

「そうだな。見ていこう」

いつまで一緒にいられるかはわからないけれど。

今になっても、ぼくは覚悟はできてない。

種の違い。

人と吸血鬼。

変えようのない事実。

それでもいいと、ぼくはようやく思うことができた。

リゼが望むのならば、ぼくはずっとそばにいよう。

「リゼ」

リゼは視線だけをこちらに向けた。

「姫さま！」

突然。

どこからともなく、そんな声が聞えた。

ぼくの右手が シケナルグリーン 虚構殺し に伸びる。

「探しましたぞ！ ドギイ！ こっちですぞ！」

目の前に現われたのは、赤い瞳で二本足のカラスだった。

その声の後、空から降りてきたのは小さな……なんだろう？ ア

イーナが使役していたインプの小型版？ みたいなやつだ。

「え……あつ！」

リゼが声を上げる。

目の前にいるのは、異様な生物。明らかに虚構の存在で、こちら
の存在ではない。

「ドギイ！ アグウ！」

「知り合い？」

「うん。あのカラスがドギイで、プチガーゴイルがアグウ」

ガーゴイルって確か、石像の悪魔だったか。

よく覚えていない。

「姫さま！ お探しましたぞ」

カラスがいやに丁寧な言葉遣いで話している。なんだかシユール
な画だ。そのカラス ドギイだったか の上にプチガーゴイル
とやらが乗っている。

ヴァンパイアハンター

「あの吸血鬼殺しめに襲われた後、行方をずっと捜しておりました」
吸血鬼殺しといえ、か。

ということは、一ヶ月も探していたことになる。

「ごめん。わたしはこの通り元気だよ」

「では、あの吸血鬼殺しは……」

「今は機関に戻ってなんかしてるんじゃないかな？ 今のところ休
戦中だよ」

休戦中、というよりは和解に近いのかもしれない。

ココだけの話し、実は とは一度だけ一緒に食事をしたことまで
ある。さすがにリゼはそこにはいなかったけれど。

「それはそれは……ん？」

と、カラスがぼくのほうにその赤い瞳を向けた。続いて背に乗っているプチガーゴイルがぼくに向く。

「その人間はなんですか？　もしか、姫さまもやっと血をお吸いに？」

「さしずめ携帯食糧か」

初対面の虚構が物騒なことを言い始める。

「ち、違うよ！　わたしのこ……友達だよ！」

「ふむ。ならば、その手に持っている物はなんですか？」

猜疑心を隠すこともせず、カラスはぼくに向かって言う。

「貴様！　それは シグナルグリーン 虚構殺し　じゃないか！」

プチガーゴイルが叫ぶ。

「なっ！　なるほど、あの吸血鬼殺しの差し金か！」

どうしてそうなる！

「違う！　断じて違う！」

「やかましいわ！」

ぼくの反論に被せるように、カラスが叫ぶ。

「アゲウ！」

「任せる！」

プチガーゴイルがぼくに向かって飛びかかってきた。

あれ？

こいつ、体が大きくなっていないか？

気づけば、プチガーゴイルの体は、ぼくよりも大きくなっていた。

「覚悟しろ小僧！」

「ちよつと！　二人ともやめなさい！」

リゼが叫ぶ。

「姫さまはたぶらかされているのです。この下種な男に！」

下種な男って、ぼくのことか？

「アゲウ！」

ガーゴイル　もう『プチ』はいらない

がぼくに襲い掛かる。

鋭い爪がぼくの体を掠めた。

「『生は死の礎。幸福とはすなわちそれを全うすること。我は空。我は虚無を統べる者。死を恐れぬ者には最大不幸を。我は泡。我は刹那に生きる者。我は世に幸福をもたらす者なり』」

声が聞えて、カラスのほうに一瞬だけ視線を飛ばす。

カラスの前には青い本が浮いていた。

「ドギイ！ それは駄目！」

リゼが叫ぶ。

瞬間。体から力が抜け、ぼくは片ひざをついた。

「ふん。魔導書の力を受けてもまだ意識があるのか」

ガーゴイルがぼくを見下ろし、馬鹿にしたように言う。

「魔導書？」

聞いたこのない単語だ。

「知らないのか？ お前が使われたのは トリガーエンド 幸福論 という魔導書だ」

名前なんてどうでもいい。とりあえずは、あのカラスの前に浮かぶ魔導書とやらをどうにかしてしまえばいいわけだ。

魔銃を構えて魔導書に向ける。

「させられないな」

ガーゴイルの爪が迫る。たまらず照準をずらして、爪をかわす。

「なんだ？ その魔銃は見かけだけか？」

もちろんこの魔銃は本物だ。虚構に撃てば、その存在する力を奪っていく。

しかし、それをこの二人に撃つのか？ いきなり襲い掛かってきているけれど、リゼの知り合いのようだ。撃つて殺してもしたら、リゼにあわせる顔がない。今はとにかく、あの魔導書をどうにかしなくてはいけない。

「やめなさい！ 二人とも！」

転げまわるぼくに飛んでくるはずだったガーゴイルの爪は、しかし、ぼくの目の前で止まった。

「姫さま、何を」

体の自由が利かないのか、ガーゴイルはぼくをまさに斬り裂こう

とした姿勢のまま、首も動かさずに言った。

「やめなさい、と言ったのよ。ドギィ、アグウ」

静かな声。しかし、それは激しい怒りの裏返しだ。燃えたぎるような赤い瞳だけは、それをごまかすことはできない。

「しかし……」

「使い魔のくせに、わたしに逆らうの？」

「使い魔？」

このふたりはリゼの使い魔なのか？

「……かしこまりました」

ふっと、体が軽くなる。

カラスの前には魔導書はなくなっていた。ガーゴイルの体も、元のサイズに戻っている。

「ふたりとも、わたしを心配してくれるのは本当にうれしいんだけどね」

呆れたように息をつく。実際、呆れているのだろう。さっきまでの怒りは感じられなかった。

「この人はヒラノタク。わたしの命を救ってくれた人だよ？ その人に向かってなんで攻撃をしかけてるのかな？」

リゼの平手が二人の頭に飛ぶ。

「はあ……大丈夫？ タク」

「あ、ああ。パワフルな知り合いだな、リゼ」

「貴様！ 姫さまになんて口の聞き方！」

ガーゴイルが叫ぶ。

「いいんだよ。こつちの世界じゃ、わたしは王族じゃないもん」

「しかし……」

ガーゴイルはまだ何かを言いたそうだったけれど、リゼが隣にいるからだろう、何も言わなかった。ただ、突き刺すような視線をぼくに向けただけだった。

「だいたいね、あのまま戦ってたなら、ドギィとアグウがやられてたよ。二人は にも勝てなかったんだから」

呆れた声で二人（二匹？ 二体？）に言う。

「？ とは……」

「あの吸血鬼殺しの名前だよ」

ぐっ、と言葉がつまり、二人（もう二人でいいや）は苦々しい表情を浮かべた。

しばらくリゼのお説教が続き、二人は疲弊した顔をしていた。反省をしたのかもしれない。まあ、ぼくに対する態度はほとんど変化しなかったけれど。一応、『敵』という認識だけはなくなっただけだ。

「申し訳ない、と一応言っておきましょうか？」

ドギイが言葉とは裏腹に上からモノを言う。

「いや、別にいい。というかお前、謝罪する気ないだろ」

「そのとおりにございます。アグウ、謝るならあなたがしなさい」

「断る」

……こいつら。危うく冤罪で殺そうとしておいてこの態度かよ。

「まあ、いいよ。で？ 二人はリゼの使い魔ってことでいいのか？」

「ええ。ワタクシたちは姫さまにお仕えする者にございます。名はすでに姫さまから聞いています。省かさせていただきますよ」

やけに丁寧な物言いが、逆にぼくを軽んじているように感じさせる。当然だろうけれど、同じ言葉遣いでも、リゼに対しているときとは印象が全く違う。慇懃無礼、という言葉はこいつの為にあるのかもしれない。

「ヒラノタク」

「うん？」

「お前には一応感謝している。姫さまを助けてもらったのだからなアグウが、やっぱり不機嫌そうに言った。ぼくが本当にどうしようもなく嫌いらしい。ぼくも好かれるとは思っていないけど。それにしても、二人してパタパタとリゼの周りを飛んでいるのは、なんとなくかわいく見える。」

「あ、タク」

「どうした？」

「そろそろ帰らないと、明日起きれないかも
時計を確認する。」

ドギイとアグウの登場により、どうやら必要以上に夜更かしをし
てしまったようだ。

「どうしてお前たちがいるんだよ」

「こういう展開はお決まりなのだろうか。」

いつものようにリゼと二人で登校。いつもと違ったのは、リゼの脇にドギイとアグウが飛んでいることだ。

「大体、そんなに堂々と飛んでたら目立つだろ」

リゼは外見は人だから問題はないけれど（金髪で赤い目はかなり目立つけれど）、赤い目で三本足のカラスとプチガーゴイルはどう考えても規格外だ。

「オレたちは姫さまに仕える者だ」

「ワタクシたちは姫さまを守る義務と意思があります」

アグウの強さは身をもってわかったけれど、ドギイって戦闘能力はあるのか？

「ワタクシは直接的には戦いませんからね。ワタクシは魔導書を使用するのです」

昨夜のことをお忘れですか？ と、心底馬鹿にした目でぼくを見る。

ぼくって、こいつらに何か悪いことをしたのかな？ 全然身に覚えがないのだけど。

「その魔導書ってのは何なんだよ」

ゲームとかではたまに出てくる単語ではあるけれど、現実世界においては何にすることは無い名前だ。

ぼくの質問に答えたのはドギイではなく、リゼだった。

「魔導書ってというのは、^{マジック}魔導に関する知識が記された本だったり、そういう意図があったわけじゃないけれど、なぜか『そう』なってしまった本のことだよ」

「つまり？」

「魔導書には魔力が宿ってるの。魔導書はそれぞれに違った特性を

持つていて、使用者の魔力と引き換えにその力を発揮するんだよ」
なるほど。だからぼくは昨夜、あんな風に体の自由が制限された
のか。

「昨日ワタクシが使ったのは トリガーエンド 幸福論 という魔導書でして
リゼの言葉に続けてドギイが話し出した。」

「生を終えることが幸せに続く道だ、という思想が記されたも
のです。元々は筆者の思想を書いただけのものだったのですが、ワ
タクシがちょいちょいと手をかけてやりましたら、魔導書に生まれ
変わったというわけです」

「魔導書つてのは、簡単に作れるものなのか？」

「貴重なものなのかと思って身構えていたけれど、案外そうでもな
いのもかもしれない。」

「とんでもない！」

けれど、ドギイはぼくの予想とは違った反応を見せた。

「魔導書はとても貴重な品なんですよ トリガーエンド 幸福論 だって、運が
よかっただけなのです」

「ふうん。なあ、ドギイ」

「なんですか？ 馴れ馴れしく名を呼ばないでください」
いちいちむかつく奴だ。

「そもそもどうして、魔導書が必要なんだ？」

「ぶはっ！ 聞きましたか、アグウ！ こんなこと言ってますよ」
「世界が違えばここまで思考が違うのか」

ドギイはぼくを視線だけで見下し、アグウは一人感心していた。
言葉遣いや、役割分担で誤解しそうだけど、性格が悪いのはドギ
イのほうらしい。

「ドギイ？」

リゼが少し責めるような目で睨むと、頭脳派のカラスは気まずそ
うに身を縮めた。

「こつちの世界でも色々あったけど、わたしたちが元いた世界じゃ
もっと争いがあったんだよ」

ドギイの代わりにリゼが説明をはじめ。

「こつちの世界で剣や銃を使用したり、戦闘機なんかを使ったりするよつに、わたしたちは魔導書を使ってたんだ」

「えっ！　じゃあ、昨日のぼくってかなり危なかつたんじゃ」

「お前にはかなりの魔術適正があるよつだ。それから魔術耐性もな。我ら魔族にもそれほどの力を持った輩はあまりいない」

品定めするよつなアグウの目。

「本来、トリガーエンド幸福論の力はあの程度ではない。たとえば……」

アグウはぼくたちの前を歩いてる男の人を指差した。

「あの男にその力を発揮すれば、一瞬も耐えることなく命を落とすだろつよ」

身の毛もよだつ、とはこのことが。

今生きていることが奇跡のように感じる。

「だから魔術適正があると云つたのだ。ヒラノといったか、お前、その魔銃を連続して何発まで撃てる？」

ぼくの持つ魔銃 シケナルグリン 虚構殺し。

虚構を殺すことに特化された魔銃。

「数えたことはないよ。一度だけ、自分でもわからないくらい連続したことはあるけど……」

この町を襲つた魔術師　アイーナ・リューゼンディツヒの使い魔を撃つた時、恐怖に耐え切れなくて、ぼくは無意識の内に何発も撃っている。

「その時、お前は意識を失つたりしたか？」

「いや？　その後も五、六発撃つてるし、次の日からふつとに学校に通つてるけれど」

体の異変なんて何も無い。

これっぽつちも。

むしろ、また日常に戻つたことで精神的に安定を取り戻したくらいだ。

ただ、やっぱり、アグウにしてみればこれは異常なよつだ。

「異常というよりは異質だな、お前の場合。お前、本当に人間か？」
「人間だ」

断言しよう。

「そうか、人間か」

自分に言い聞かせるようにアグウが呟く。そんな丁度良いタイミングで、ぼくたちは学校へと到着した。

敷地に入ると生徒の視線を強く感じるようになる。今までではリゼの存在が普段の大きな要因だったけれど、今日の原因はリゼではないだろう。

プチガーゴイルと三本足のカラス。

「なあ、やっぱりさすがに目立つんだけど」

視線には慣れている。

が。

それにも限度はあるというものだ。

「そう言われましても、ワタクシとアグウは姫さまをお守りするという使命がありますゆえ」

「目立つだろうって」

「目立つことの何が悪いのですかな？ 身の安全よりも視線が気になる」と

このカラス……。

「あのね、ドギイ」

リゼは額に手を当て、ため息混じりにドギイを見つめた。

「学校つていうところは、基本的に安全だから。その、ね？」

その言葉を聞き、ドギイは大きく目を見開き、口をぱくつかせた。

「ひ、姫さま！ そんなお命を軽んずる様なことを！」

大きな声は廊下に響き、生徒たちの視線を集める結果を招くことになる。

やれやれ、とアグウまでもがため息をついた。

……頭脳係、変えたほうがいいのではないだろうか。

教室に入り、クラスメイトの反応というものは予想以上に予想通りだった。

順応性の高いクラスだ。

リゼが編入早々吸血鬼宣言をした時のように、この異形の二人を受け入れてしまった。

「ふむ。なんとも愚能な連中の住処なのですね、この場所は」

と、ドギイはまわりに聞えない程度の声で呟いた。

「愚能ってどういうことだよ」

ささやき返す。

「他種族がいるというのに、安穩と『仲良くしてね』などのたまうような輩が、愚能以外のなんだというのですかな？」

「お前の言うところの愚能とリゼは親しいわけだが、そこはどうするよ」

そのリゼはというと、今は細江さんと話をしている。

「本当に困ったものです。早くお目をお覚ましにならねないと、こちらの世界に毒されてしまいます」

本当に言いたいことを言う奴だ。ストレートに物を言う人に好感を持つ人もいるようだけど、さすがにこいつに対しては好感を持つことはできないだろう。

「城にいた頃よりも明るいということは、否定のしようもないがな」
窓枠に座っていたアグウがもらす。

「前はあんな感じじゃなかったのか？」

「いや、あんな感じだった。ただまあ、殺伐とした世界だからな。笑うなんてことはあまりなかったが」

余裕がなかったからな、とアグウは続けた。

「だからといって、こんな下々の者と対等にならなくても良さそうなものですがね」

「この世界では姫さまは姫さまではないのだからさ。ご自分でそうおっしゃっていたではないか」

「アグウ、お前、ぼくと話が合いそうだな。少なくともドギイよりは」

「うれしくないが、確かにそのようだ。と、いうよりもドギイの頭が固すぎる」

「なんですと！」

ドギイとアグウがにらみ合い、その間に火花が散っている。思ったよりも仲は良くないのかもしれない。

「よう、平野。そっちの二人は初対面だな」

登校してきて灰谷は、ドギイとアグウに対して、特に変わった反応は見せなかった。見ただけで正体を察したのかもしれない。

「うん？ お前、その目は……ドラゴンの類か？」

「ああ、ドラゴンだ」

事も無げに正体をさらす。

「良ければ、人としての名と共に竜としての名も聞きたい」

アグウが興味を持つなんて珍しい。とか、昨日知り合って珍しいも何もないか。

「人の名は灰谷琴音だ」

「竜の名は？」

「五大竜が一体、虚竜のハイネだ」

「五大竜？ ほう、こんなところでお目にかかれるなんて光栄ですな」

どこか馬鹿にしたようなドギイの口調。灰谷の言葉を信じていないのは明白だった。いちいち癪に障るやつである。

「ドギイ、お前は少しばかり利口になったほうが良いのじゃないか？ 最近は頭脳派と言いつつも、馬鹿なところしか目に入らん」

冷静なアグウのツツコミに、ぼくは思わず手を叩いた。

「紹介が遅れたな。オレはリーゼ・ブリュスタンさまの使い魔。プチガーゴイルのアグウだ」

「リゼの使い魔か。こちらこそよろしく頼む」

「ワタクシも右に同じ。ヤタガラスのドギイにございます」

ヤタガラス、か。三本足のカラスで、常人が見たら発狂するとか何とか。やたら神格が高い神の使いやらなんやら。

戦に赴く何某を導いたとか。

正直よく覚えていない。正しいかどうか微妙だ。

というか、どうしてヤタガラスが吸血鬼の使い魔なんてやってるんだ？ それこそ格というか核がちがうだろうに。初めて会った時はあまり疑問に思わなかったけれど、落ち着いて考えてみればおかしいような気がする。

「ふうん？ ヤタガラスの血も落ちたものだな」

さっきの仕返しか、灰谷の対応は冷たかった。

そして、うすうす気づいていたことではあったのだけれど、ドギイの沸点はどうしようもなく低い。

「小娘、お前、ワタクシを侮辱するのですか」

「いや、そんなつもりは毛頭ない。ただ……オレは思ったことをそのまま口にしてしまう性格なんだ。許しておいてくれ」

ふつうなら挑発に使うようなこの言葉も、灰谷が言えば大体正しいから扱いに困る。当然、そんなことを知らないドギイにしてみれば、それは宣戦布告のようなものだ。灰谷も当然そのくらいはわかっているはずなのだけど。

血が騒いでいるのだろうか。

ドギイの前に本が現れる。

その本には見覚えがあった。

「お前っ！」

「生は死の礎。幸福とはすなわちそれを全うすること。我は空。

我は虚無を統べる者。死を恐れぬ者には最大不幸を。我は泡。我は刹那に生きる者。我は世に幸福をもたらす者なり」

魔導書を発動する詠唱を早口に済ました。ぼくが止める間もなく、魔導書の力は灰谷に襲い掛かる。

しかし。

「なんだ？ オレはコツチだが」

たった今まで話していたはずの灰谷の姿が揺らめき、影となって消えた。

「む？」

「ドギイ、お前、本当は頭は良くないんじゃないか？ 虚竜のハイネ。知らないわけではあるまいに」

「こんな小娘がああ虚竜なはずがあるわけないでしょう。異世界であるワタクシたちが知りえるほどの強力な竜であるはずが」

まわりの連中は気づかない。大きな声も、学校の休み時間では珍しくもない。しかもタイミングがいいのか悪いのか、リゼと細江さんは教室から出て行ってしまっているようで。魔導書を発動したから、もしかしたら魔力を感じて帰ってきているかもしれないけれど。

「アグウ、こんな小娘にたぶらかされてはいけません」

「あんなあ、ドギイ。嘘をつくにしても、アレを騙かたるのは愚か者の行いだ」

「この娘が愚かなのですよ」

ポツ、と、ドギイの顔の真横に青白い炎がきらめく。

「自己紹介するぜ。オレは灰谷琴音。虚竜のハイネだ」

「世迷い事を」

吐き捨て、挑発的な目で灰谷を睨む。

「だから、オレはこっちだ」

また。

また灰谷の立ち位置が変わっていた。

今度はぼくの後ろ。気配なんて全くなかった。というか、そこに立たれるとぼくを盾にしているようにしか見えないのだけど……灰谷さん？

「中々やるようですが……」

「何してるのかな？ ドギイ？」

立っていたのはリゼ。怒り心頭といった表情だ。

「な、ひ、姫さま」

「アグウ。魔導書を準備して」

ドギイを無視し、アグウに指示を飛ばす。アグウはドギイに呆れた視線を向け、どこからか取り出した魔導書をリゼに渡した。

「『黒翼に抱かれて海に潜る。蒼炎に吞まれて地を駆ける。希望と絶望を取り違え、孤独に涙する。悪鬼に追われ、尚撒けず。光に手を伸ばせど、尚掴めず。深き穴の底で自身を恨む』」

ドギイは必死の形相でリゼにすがる。

「ちょっとは反省しなさい」

ぴしゃり、と。

リゼがドギイの懇願を払った直後、ドギイの姿が消えた。

「なっ、リゼ……あいつは？」

消えたドギイ。

怯えていたドギイ。

「ん？ ああ、ちょっとお仕置きしただけだよ。二、三日は反省タイムかな」

「お仕置きって……」

どんなものなのか、なんて。そんなのは口が裂けても聞けない。

リゼは魔導書をアグウに渡した。

「ドギイって知識はあるくせに使い方がわかってないから」

呆れたと呟くりゼは、どうしようもなくいつもどおりだった。

「アレは死んだりとかしないのか？」

どうでも良さそうに灰谷が聞く。

「まさか！」

ぶんぶんと手を振り、リゼはそれを否定する。

「死んじやったりしたらわたしが困るよ。ちゃんと加減してるよっ！」

ぼくは死んだものだとはかり思っていたけれど。消えた時なんて特に。

「しかし、あの馬鹿は一度死なんと治らんな。……さっきはすまな

かつたな、ドラゴン」

「いや、気にするな。アグウだったか　お前が気にするよつな」とじゃない」

とりあえず、一番ややこしい奴は退場になった。

そして、ややこしい奴ではないけれど。それゆえによくわからない奴の登場が近づいていた。

放課後である。なぜか意気投合したアグウと夏樹。別れる時には力強く拳を当てていた。そんな男の友情(?)を披露した帰り道。

「どうしてあんなに意気投合したんだ？」

「オレはああいう馬鹿が好きだ。それだけのことだ」

夏樹。お前はやっぱり、愛される馬鹿なんだ。

「ぼくのことには好きにはなれないか？」

冗談で聞いてみる。

「好きにはなれんが、それなりには気に入っている。出会い方が少々まずかったただけだ」

「柔軟な思考だな」

「お前や姫さまには劣るよ」

「ドギイにもアグウの半分くらいの柔軟さがあれば問題ないのにと。」

その姫さまは愚痴を漏らした。

「知識のある天才も中々ですが、知識のある馬鹿も中々扱いづらいですからね」

アグウの相づちにほくも大いに賛同する。前者には会ったことはないけれど、後者は確実にドギイだ。賛同することに全くの躊躇は無い。

「じゃあ知識のない馬鹿はどうだ？」

ほくは夏樹を連想して言った。あいつの知識量は、高校生のそれとは比較にならないと思う。まあ、勉強の方は結構できるのだけど。知識量と学力はあまり関係がない、ということなのかもしれない。

「それは始末に困るな」

アグウは苦笑する。

「そりゃそうか」

聞いた自分が馬鹿馬鹿しく思う。

「ねえ、タク」

「うん？」

「それ、ナツキを連想して言ってない？」

「まさか、そんなわけないだろ？」

「凶星でしょ？」

「いたずらっぽい笑みを浮かべるリゼ。」

「凶星だなんて、口が裂けても言いたくない。」

「いや、そんなわけがない」

「凶星、なんでしょ？」

「違います」

「むっ、と頬を膨らませ、リゼは少しだけすねた感じで言った。」

「凶星のくせに」

「……凶星でした」

「どうもぼくはリゼには敵わないらしい。」

「良くも悪くも。」

「よろしい」

「と、面倒見の良いお姉さんみたいな笑みをリゼはもらった。」

「放課後の帰り道。」

「人間。」

「吸血鬼。」

「ガーゴイル。」

「不思議だよな、こついうの。」

「お前は不思議なやつだな、ヒラノタク」

「え？」

「ただの人でありながら、どうしてそうも虚構と一緒にいられる」

「は？ よくわからない質問だな」

「一緒にいられない理由でもあるのだろうか。」

「ふつつなら距離を置きたがるものだと思うが」

「そうかな？ ぼくはそう感じたことはないぞ」

「死にかけたこともあるけど。」

それでも『会わなければ良かった』とか『どこか遠くに行ってほしい』とか、そんなことを思ったことはない。

「オレはこの世界に入って来てから、何度も排斥されかけたぞ」

「まあ、そういう人もいるだろうさ。虚構というものを知らない人なら、な」

ぼくは出会いの方が良かったのかもしれない。ずいぶん危険な橋を渡ったように思うけど。

「そういう思考をするからこそ、お前は不思議だ」
「……………」

よくわからない。よくわからないけれど、これは褒められているのだろうか。

「褒めてないぞない。評価しているだけだ」

「素直じゃないね、アグウ」

クス、とりぜが笑った。

「そういうわけではありませんよ、姫さま」

「じゃあどういうわけなのかな？」

「ヒラノタクに対するオレなりの評価です」

「良い評価、なんでしょ？」

「姫さまは野暮です」

アグウはそっぽを向いて、そう答えた。こついつところはなんとも人間臭い。

「はは、怒られちゃった」

子どもっぽく笑う。

「アグウがツンデレなのはわかったけど、ドギイってどうなの？」

ギロリ、とアグウがぼくを睨む。ツンデレを知ってるらしい。変なところで知識を持っているやつだ。

「うーん、どうっていうわけでもないと思うよ」

「ドギイはあのままだ」

不機嫌な声を出す辺り、ぼくは余計なことを言ってしまったようだ。忘れるまで待つとしよう。

「あのままっというっ？」

「あのままはあのままだよ。頭が固くて偏屈なの」

「そして思い込みが激しく、豊富なはずの知識を活用しきれない」

ダメダメじゃないか。

「高貴で崇高な種族の眷属のはずなんだけどね」

リゼが残念そうに呟く。

たしか、あいつはヤタガラスだったか。

どうして日本神話に登場するカラスが、吸血鬼の使い魔なんかやっているのが本当に疑問で仕方ないけれど。

聞くに聞けない。

「知識量だけなら、本当に素晴らしいものがあるのだがな」
本当に残念そうだ。

「アレは性格なのか」

「性格だ」

「性格だよ」

どうにも。

ドギイはぼくのことを嫌っているようだけど 本当はどうしようもないほどに ぼくも彼のことは、好きになれそうにもなかった。

その日の夜。ぼくとリゼは夜の道を歩いていた。アグウはドギイのようリゼの護衛という役目に対してそれほど使命感を持っておらず というよりも、その必要性がないと感じているらしく ついてくることはしなかった。もしかしたら、気を遣ってくれたのかもしれない。

今日はぼくからリゼを連れ出した。リゼは、ぼくと初めて会った時と同じドレスを着ている。真っ白なドレス。

街灯が照らす光はひどく頼りなくて、妙な心細さを感じるのだけど、それが妙にリゼのドレスの白さを際立たせていた。

「ぼくさ」

ぼくだって無意味にリゼを外に連れ出したりはしない。用もないのにこんな不快な空気を巻き散らかす場所になんて、一歩たりとも出たくない。

「いろんなことから逃げてたんだ」

本当にいろんなことから。

これは懺悔にも似た告白だ。

「だから一つくらい逃げなくてもいいように決着しようと思う」「ふうん？」

その一つが、ぼくにとってはとても大切なことで。

重大なことだ。

それこそ、人生が変わってしまうほどに。

「リゼ」

「なにかな？」

「これからぼくとこの 世界 を一緒に見ていかないか」
「……………」

ぼくの言葉の意味するところを考えているのか、リゼは無言だった。

いや、意味が分からないなんてことはない。

なぜならこれは、昨日の会話の続きなのだから。途中で終わってしまった話の続き。

「それは」

ゆっくりと。

リゼが言葉をつむぐ。

「季節も？」

「季節も」

「心も？」

「心も」

「盛衰も？」

「盛衰も」

淡々と、リゼの質問が続く。

「世界の果ても？」

「どこまででも」

「終わりも？」

「終わりも」

言葉が途切れる。

きつと、次で最後。

そして 一番大切なこと。

「決別も？」

種族の差。

人間と吸血鬼。

超えられない、種としての壁がある。

「決別も。ありとあらゆるこの 世界 の全てを君と感じよう」

5 (後書き)

次回が最終回です。

風が吹いた。

湿度の高い風の中を、カラリと乾いた風が舞った。

もしかしたら、そう感じただけなのかもしれないけれど。

「ぼくは 旋風に生きる者」

夜。

アパートに帰ってくると、そこには久々に見る顔があった。久々だと思ってしまう顔があった。

「虚構を殺す者との約束を果たしに参上した」

銀色の髪をなびかせ、そいつはそこに立っていた。

「どこかに行ったものとはかり思っていたよ」

となりのリゼもうなずく。

「それは間違いだ、虚構を殺す者。そして鮮血に生きる者」

旅人は笑う。それはかすかなものだったけれど、たしかな笑みだった。

「前にも虚構を殺す者には言ったと思うが？ ぼくは旅人。旅人は関係に飢えている、と」

「でも、旅人は定住をしない。定住は旅の終わりを意味するからだ」

旋風に生きる者が旅を終えるのは、その地を死地と決めたと
きだ。

「そのとおりだ。虚構を殺す者。ぼくはこの町を、ぼくの死地と決め
めた」

よどみなく。

当たり前のことのように、リンクスは言う。

「ぼくはこの町に住むことを決めた。だから虚構を殺す者と約束し、
今、それを果たそうとしている」

暗闇の中。

リンクスの銀髪が揺れる。

きらきらと。

「あの日から今日まで、少しの期間だったが他の地へ足を運んだ。でも駄目だ。駄目すぎる。ぼくを　　旋風に生きる者　　が住むには、ここ以外の町は風が悪い」

「風が……悪い？」

「ぼくは風とは同一かつ異なるもの。風がぼくの全て」

よくわからない。けれど、実際、ぼくはこんな会話をする必要もないのだ。リンクスの部屋は、あの日からずっと準備されている。あと必要なのは、住む人だけだ。

「リンクス」

「なんだ、鮮血に生きる者」

「ようこそ」

「ああ、よろしく頼む。ぼくは　旋風に生きる者　。世界を巡る風に誓い、この地に根をはる」

リンクスのアパートへの入居は、滞りなく終了した。起きたイベントといえば、リンクスを見た黒木さんのテンションが、馬鹿みたいに上昇したことだ。リゼに会ったときのような元気さだった。

「また女の子が入居したんだね……」

細江さんが、呆れたように言った。

「いや、それをぼくに言われても困るよ。入ってくるのは、本人の自由なんだし」

別に、ぼくが女の子だけに入居を勧めているわけではない。というよりも、ぼくにそんな権限なんてない。

「平野くんのアパートって、平野くん以外に男の人っているの？」

「いるよ。何？ そのハーレムみたいなアパートは」

「へえ……？　いるんだ」

「あ、ああ。同い年のアルバイターが一人」

妹と同居だから、差し引き零。引き算するようないけれど。

「と？」

「大学生のお兄さんが一人」

「と？」

「それだけ」

別にアグウやドギイを人数に数える必要はないだろう。むしろ、数えたら怒られそうだ。

「女の人は？」

「えっと……」

「即答できないほどの？」

疑り深い目。

ぼく……何か悪いことしただろうか。

とりあえず。

何人だ？

「五人だけど」

「多いねっ」

その笑顔はとても魅力的だったけれど。

ぼくにしてみればそれは 悪魔的な笑顔だった。

ともあれ。

こういう軽口を叩けるまでには、関係は修復されたわけで。

「ま、まあ……そうだよな。はは、ははは」

それはうれしいことなのだけど、少し怖い気もする梅雨の終わり頃。

6 (後書き)

『スクランブルワールド2』はこれにて終了です。
楽しんでいただけたでしょうか？

人気投票は投票期間が終了しました。

結果は人鳥のブログにて公開中。

[http://id1153.blog120.fc2.com/
blog-entry-301.html](http://id1153.blog120.fc2.com/blog-entry-301.html)

人鳥の次回作にご期待ください。

……なんだか自分で書くと嘘っぽいからこの文句はこれから使わないようにします。

【追記】

本作の投稿ジャンルは今まで『学園』でしたが、『ファンタジー』にジャンルを変更しました。(前作、今作とも)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4571n/>

スクランブルワールド 2

2011年7月18日03時31分発行